

築館町文化財調査報告書第5集

伊治城跡

—平成3年度発掘調査報告書—

平成4年3月

築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第5集

伊治城跡

平成4年3月

築館町教育委員会

序　　言

伊治城は宮城県内に所存する古代城柵の中で、築城年月が確定している唯一の城であります。それだけに、この城跡の発掘調査に期待するものは実に大きいものがあります。

伊治城跡の調査は、第一次調査が昭和52年度から3年間を、第二次調査は昭和62年度から5ヶ年間実施いたしました。夫々各年に成果を挙げた事は、各年度の報告書を一覧されることによって判然といたしますが、とくに、第二次調査の最終年に当たる本年度において、遂に念願の政庁建物群の一角を掘りあてました。まことに欣快の至りでありますと共に、この成果を直接あげていただいた宮城県教育庁文化財保護課菊地逸大主査をチーフとする調査チームに感謝をいたします。更に、直接間接ご指導をいただきました文化庁、宮城県文化財保護課、東北歴史資料館を始め関係の方々、そして調査に積極的に協力をいただいた地元の皆さんに心から御礼を申し上げます。

調査はこれからなお継続いたしてまいります。さらなるご援助、ご協力をお願いいたしまして挨拶といたします。

平成4年3月

築館町教育委員会

教育長 千葉 與一郎

例　　言

1. 本書は、栗原郡築館町字城生野に所在する伊治城の平成3年度発掘調査の報告書である。
2. 本書には、国庫補助事業計画にもとづく第17次調査と、個人住宅建設に伴う第18次調査の結果を収録した。
3. 本書の作成は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、整理・執筆・編集は課員の検討を経て、第17次調査については菊地逸夫と千葉長彦が、第18次調査については佐藤則之がおこなった。
4. 本書における土色についての記述には「新版標準土色帖」(1973)を利用した。
5. 本書の第1図は国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」「築館」を複製して使用した。
6. 調査における地区割(グリッド)は、城生野公民館前の発掘基準点(伊治1)を原点とする直角座標を組んで割り出している。
基準線の南北軸はN-2°Wである。なお、図中のW-10、S-180などの表記は発掘基準点から西に10m、南に180mであることを表す。
7. 図中にある方位は、座標北を表している。
8. 遺構略号は次のとおりで、通し番号で各遺構に付した。
SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡 SI：堅穴住居跡 SK：上塙
SX：その他の遺構
9. 調査成果の一部は、すでに現地説明会・第5回宮城県遺跡調査成果発表会・第18回古代城柵官衙遺跡検討会で公表しているが、本書の内容はこれらに優先するものである。
10. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、築館町教育委員会が一括して保管している。
11. 本文の1項「遺跡の概要とこれまでの調査成果」およびII項「遺跡の位置と周辺の遺跡」は築館町文化財調査報告書第4集「伊治城跡」を一部加筆し再録したものである。
12. 出土遺物観察表中の分類基準は築館町文化財調査報告書第4集「伊治城跡」によるものである。
13. なお、発掘調査や、資料の整理に際し、次の方々から多大の御指導、御助言をいただいた。
記して、感謝申し上げたい。(敬称略)
工藤雅樹(福島大学) 上野秀一(札幌市教育委員会) 藤沼邦彦(東北歴史資料館)
丹羽茂(多賀城跡調査研究所) 金野正(元築館女子高校教諭)
佐藤信行(日本考古学协会会员)

調査要項

1. 遺跡名 伊治城跡（宮城県遺跡搭載番号：41007）
2. 所在地 宮城県栗原郡築館町字城生野地内
3. 調査主体 築館町教育委員会（教育長 千葉與一郎）
4. 調査面積 第17次調査 約1300m² 第18次調査 約300m²
5. 調査期間 第17次調査 1991年5月27日～7月16日
第18次調査 1991年11月19日～12月2日
6. 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課
7. 調査員 第17次調査
宮城県教育庁文化財保護課
白鳥良一、菊地逸夫、木皿直幸、吾妻俊典、早川英紀
築館町教育委員会
早川浩義、遠藤義勝、千葉長彦
第18次調査
宮城県教育庁文化財保護課
白鳥良一、小井川和夫、阿部博志、佐藤則之
築館町教育委員会
早川浩義、遠藤義勝、千葉長彦
8. 調査協力 鈴木茂、鈴木廣、千葉昭治、白鳥良知
白鳥測量設計事務所 富野小学校 築館小学校
9. 調査参加者 高橋佐一、菅原永松、千葉寿見、伊藤耕二、佐藤直一、辻市英男、大場倉由
菅原勝義、桑嶋雪男、鈴木三郎、千葉千江子、佐藤ふみ子、白鳥やえ
10. 整理参加者 岡田富子、鎌田恵子、米沢栄子、鎌田久美子、伊藤由美子、小林桂子

目 次

序	
例 言	
調査要項	
I. 遺跡の概要とこれまでの調査成果	1
II. 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第17次調査	
III. 発見された遺構と遺物	
①掘立柱建物跡	6
②築 地 跡	18
③円形周溝墓	19
④井 戸 跡	21
⑤上 墓	23
⑥溝 跡	26
IV. 考 察	
①遺物について	
○出土瓦の検討	29
軒丸瓦 平瓦 丸瓦	
②遺構について	
○掘立柱建物跡の変遷	31
○遺構の構成と性格	33
V. ま と め	37
VI. 第18次調査	
1 発見された遺構と遺物	38
2 考 察	51
3 ま と め	55
伊治城および栗原郡に関する古代史年表	
写真図版	60

I 遺跡の概要とこれまでの調査成果

8世紀中葉から後半にかけての宮城県北部は、古代律令政府が積極的に進めていた蝦夷政策に対し、蝦夷の抵抗が高まり非常に不安定な地域であった。伊治城は、律令政府がこのような情勢の中で、桃生城などとともに陸奥国経営、とりわけ栗原郡を中心とした宮城県北部における蝦夷政策の拠点にするため、神護景雲元年（767）に設置したものである。続日本記や日本後記には、延暦15年（796）までの伊治城にかかる記事があり、それらにより当時の具体的な状況を知ることができる。なかでも、この地域=上治郡の大領であった伊治公皆麻呂が宝亀11年（780）に按察使紀広純と牡鹿郡の道嶋大橋を伊治城で殺害し、さらに多賀城を攻撃し放火するという事件「伊治公皆麻呂の乱」は、当時の政府に大きな衝撃を与え、それ以後の律令政府と蝦夷の長期にわたる戦争の要因となった。このような状況下で、律令政府は延暦20年（801）までに4度の軍事遠征を展開した。また、武力行使と並行して他国からの移住策も打ち出し、延暦15年（796）には「相模・武藏・常陸など8国の民9000人を伊治城に遷し置く」などの記録も見られる。

伊治城は宮城県内における城柵の中で、桃生城とならび創建年代が文献に残されている数少ない城柵のひとつとして知られており、その所在地については、多くの検討がなされ、いくつかの候補地があげられている。所在地についての研究は江戸時代の末から行われており、弘化4年（1847）に岩崎綱雄は栗原郡築館町城生野地区を踏査し地形観察を行い、唐崎地区において古瓦を採集し、この地が伊治城跡であるとした。以後、大槻文彦、小泉安次郎、吉田東伍、松森明心、伊東信雄、高橋富雄、金野正、佐藤信行らによって諸説がとなえられてきた。

なお、伊治城跡に関する詳しい研究史については「伊治城跡I」（多賀城跡調査研究所：1978）を参照されたい。

このように伊治城跡の有力な擬定地である城生野地区の発掘調査は多賀城跡調査研究所により昭和52年度から3年間行われ、城生野大堀の台地北端で検出された大溝と土壙は外郭北辺の区画施設であることや、堅穴住居跡から出土した墨書き器や鉄器の性格から報告書では「本遺跡が伊治城である可能性は高い」との見解が示されている。しかし、この3年間の調査では伊治城の政庁や官衙ブロックなどは発見されなかった。

昭和61年度からは築館町教育委員会が主体となり調査を再開し、昭和63年には遺跡中央南寄りの唐崎地区で二重にめぐる区画溝が、平成元年には区画溝の内側から計画的に配置された5棟の掘立柱建物跡がはじめて検出された。さらに翌2年には、新たに掘立柱建物跡2棟と堅穴住居跡8軒が検出され、これらの建物群が官衙ブロックを構成することが判明した。また、出土遺物から建物の年代も伊治城存続年代と一致することから城生野地区は古く岩崎綱雄以来言

われた通り、「伊治城跡」であることが、考古学的に証明されたものといえる。

本年の調査（17次調査）は昨年の成果を受けその南東隅を対象としたもので、これまで明らかにされていなかった政庁域を解明することを主眼とした。調査の結果、築地に区画された区域と、それらの内部に計画的に配置された建物群の存在が明らかになった。また、これまでほとんど出土していなかった瓦も多量に出土しており、これらの建物の中には瓦葺きの建物の存在も予想されるに至った。これらのことから今回調査した区域が伊治城の中核部＝政庁域であることがほぼ間違いないものとなった。

18次調査は、個人住宅の建設に係わる事前調査として行ったもので、調査区は平成元年の12次調査区に隣接する遺跡の北西部に位置し、伊治城の外郭北辺の上塁の外側の部分にあたる。調査の結果、古墳時代前期（埴輪式）の区画溝と考えられる溝跡や堅穴住居跡などの遺構が検出され、この時期の土器組成を知る上で良好な土師器のセットや、それと共に伴して北大式土器などが出土している。

II 遺跡の位置と周辺の遺跡（第1、2図）

このことについては「伊治城跡I」（前出）に詳しい。以下はそれを引用し、若干の加筆をしたものである。

本遺跡は宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城跡の北約52kmに位置し、多賀城と胆沢城をむすぶほぼ中間点にあたる。

宮城県北部の地形を概観すると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山脈が南北に大きく横たわっている。この奥羽山脈は山麓部で多数の河川によって開拓され、いくつかの小丘陵に分かれている。本遺跡はその最も北に位置する築館丘陵と接する河岸段丘上に立地している。この段丘は東を一迫川、北を二迫川、西と南は小さな谷によって画され、南東部で背後の丘陵に接しており、北に張り出したほぼ方形の独立した地形をなしている。段丘面の標高は約22～24mで、その広さは東西約800m、南北約900mほどである。遺跡の範囲はこの丘陵全域と推定され、その規模は東西約700m、南北は南辺の位置を唐崎地区と地蔵堂地区を画する沢のあるあたりと考えれば、約900mとなる。段丘の東、北、西には比高約6mの段丘崖がみられ、その前面には広い冲積地が続いている。

台地上は現在、城生野地区の集落があり、大堀、唐崎、要害、地蔵堂などの小字名が見られ、100戸を超える住宅が立ち並んでいる。宅地を除く平坦部分はおもに水田および畠地として利用され、段丘崖などの斜面部分は杉林や荒地として原地形が残されている。

表面から観察される遺構としては、台地北端部に東西にのびる長さ150mほどの空堀状の大



No.	遺跡名	立地	種別	時	代	No.	遺跡名	立地	種別	時	代
1	伊治城跡	分離式跡	城	中世・近世		14	日暮城跡	丘陵上	城	前	中世
2	新野城遺跡	丘陵上	聚落跡	周文・古代		15	司馬城跡	自然屈曲谷	城	前	中世
3	宇治道跡段丘	聚落跡	鶴文・鶴牛・古代			16	祖母長根遺跡	丘陵斜面	古墳	鶴文・古代	
4	佐内原敷道跡丘	聚落跡	鶴文・鶴牛・古代			17	鶴角無火古墳群	丘陵斜面	複火古墳	古墳	
5	木戸道跡丘	聚落跡	鶴文・古代			18	大武櫛六古墳群	丘陵斜面	複火古墳	古墳	
6	山ノ上遺跡	丘陵上	聚落跡	鶴文・古代		19	解山神社遺跡	丘陵上	聚落跡	鶴文・古墳	
7	照崎合遺跡	丘陵斜面	古倉地	鶴文・古墳・古代		20	東葉寺跡	丘陵上	寺	寺	古代
8	高倉貝丘	丘陵上	貝塚	鶴文・古墳		21	船尾遺跡	丘陵斜面	古墳	鶴文・古代	
9	高田山遺跡	丘陵上	古倉地	鶴文・古代		22	奥河A墓群	丘陵上	墓	寺	古代
10	東御山北遺跡	丘陵斜面	古倉地	古代		23	民衆川遺跡	丘陵上	聚落跡	鶴文	
11	熱海城跡丘	丘陵上	城	中世・近世		24	周魚袋遺跡	自然屈曲谷	古墳	鶴文・古代	
12	西前遺跡丘	丘陵上	中世			25	大仏古墳群	丘陵斜面	円	第	古墳
13	熱ノ丸遺跡段丘	聚落跡	鶴文・古代・近世			26	宮野野跡	丘陵上	城	前	中世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区と周辺の地形

溝と、その北に接して走る土壙状のわずかな高まりがある。かって松森明心氏が作成した略図によると、この大溝はさらに西の富野小学校の西側付近まで延びていたことが知られる。

遺物については、台地のほぼ全面にわたって土師器や須恵器の散布が見られ、中でも中央部から南半分にあたる唐崎や要害地区に多く分布する。この地区ではこれまでの開田工事の際にも多量の遺物が出土しており、とくに唐崎地区からは多賀城政府Ⅱ期の瓦と同一意匠の重圓文軒丸瓦が出土している。

次に本遺跡周辺の古墳時代末期から古代にかけての歴史的環境を概観してみたい。

周辺の遺跡は二迫川流域遺跡群と一迫川流域遺跡群にわけられる。二迫川流域についてみると、北岸の栗駒町鳥矢崎から金成町紺齒にかけての丘陵上には、33基の小円墳からなる鳥矢崎古墳群がある。この古墳群のうち2基が昭和46年に発掘調査され、横穴式石室と組合せ木棺、銅製跨帶金具一式、蕨手刀などが発見されている。またこの丘陵の南斜面には大沢横穴古墳や姉幽横穴古墳群がある。これは内陸部における横穴の北限線である。

集落遺跡としては、この丘陵の東端部に立地する佐野遺跡があり、奈良から平安時代にかけての聚穴住居跡が15軒検出されている。一迫川南岸では本遺跡の他、奈良・平安時代の遺物を散布する長者原遺跡がみられるだけで、古代の遺跡は比較的少ない。

一迫川流域では、北岸の丘陵上に御弊森古墳群や小館山横穴古墳群などがみられ、南岸の笠館町伊豆野から若柳にのびる低い丘陵や河岸段丘上には鶴ノ丸遺跡、宇南遺跡、御駒堂遺跡、佐内屋敷遺跡、山の上遺跡、熊塚遺跡などの奈良から平安時代にかけての遺跡がある。中でも、御駒堂遺跡では、8世紀初頭に関東地方からの人間の移住が想定されるような土器や遺構が検出されており（小井川・小川：1982）、神護景寧3年（769）に栗原郡が建郡される以前のこの地域を考えるうえで、きわめて注目される。

また、発掘調査によるものではないが、本遺跡の東4kmには、開田工事の際検出された狐塚窯跡がある。ここでは、ヘラ切り無調整の坏を主体に焼成し、製品は本遺跡にも供給されていた可能性がある。（金野・佐藤：1976）

III 発見された遺構と遺物

第17次調査（第3図）

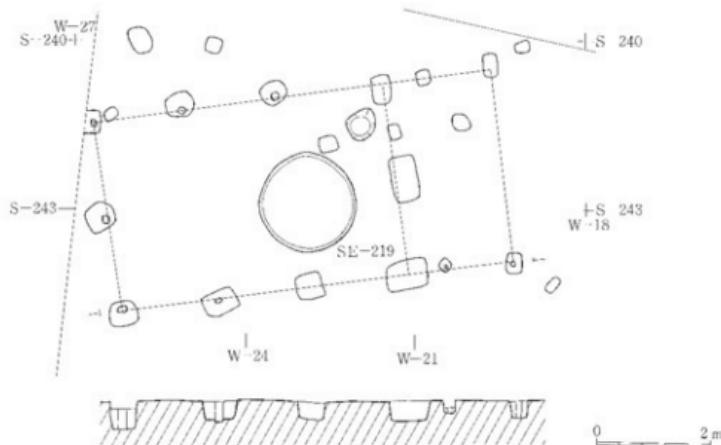
検出された遺構は、掘立柱建物跡11棟・菜地跡・円形周溝墓1基・井戸跡3基・土壌11基・溝跡10条である。また、遺物には各遺構埋下や表土中から上師器（环・甕・蓋）、須恵器（环・甕・蓋・高台付坏）・円面鏡・瓦（平瓦・丸瓦・軒丸瓦）が、遺構確認面のローム上面から、旧石器時代のブレイドやフレイクが各1点出土している。

発見された遺構

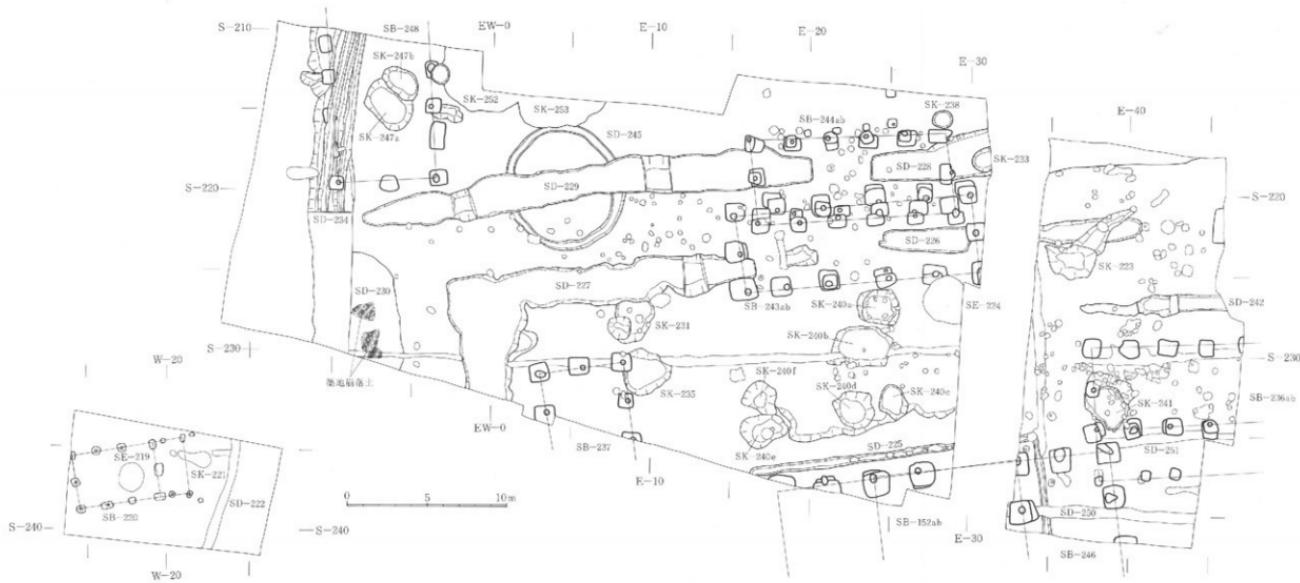
① 掘立柱建物跡

SB-220建物跡（第4図）

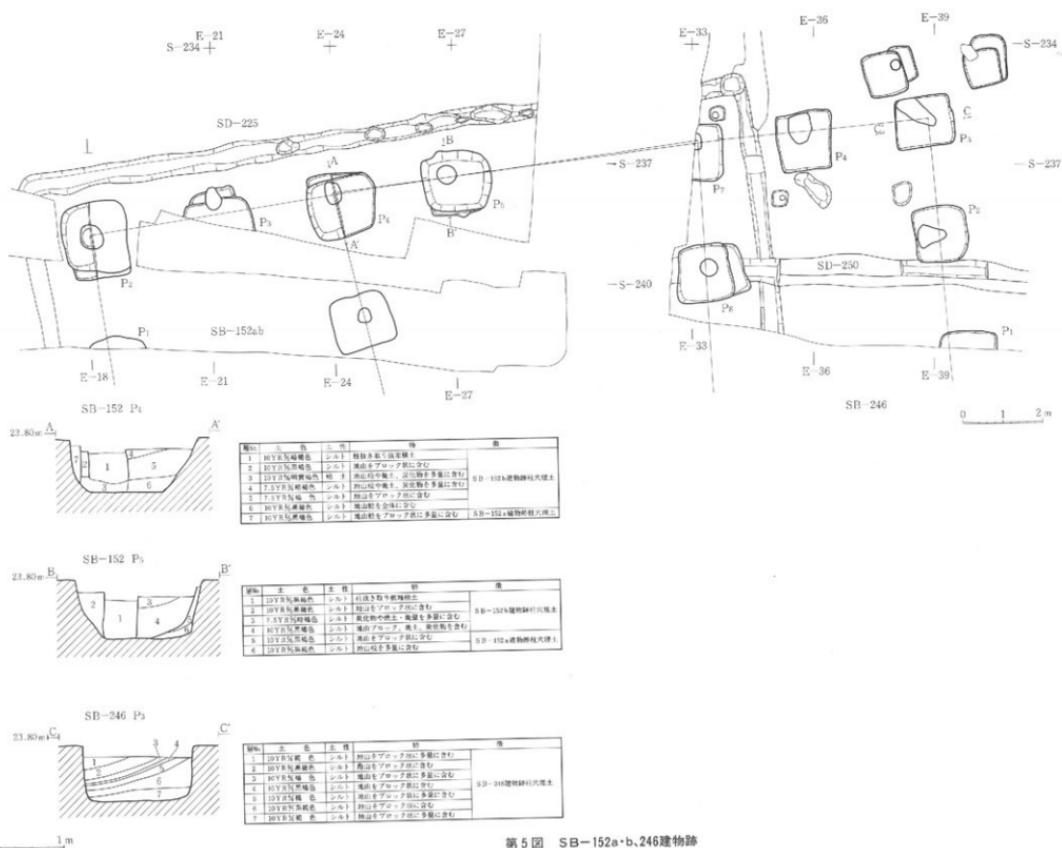
町道を挟んだ南側調査区から検出された。SE-219井戸跡と重複しているが、切り合はない新旧関係は不明である。桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、東妻の部分に2分の庇状の張り出しがある。南側柱列のP5,P6、北側柱列のP8～P10、西妻のP7では柱痕跡が認められ、それによれば柱は方形で一辺10～15cmある。柱痕跡の位置をもとにすると柱間寸法は桁行が南側柱列で西から1.7m・1.6m・1.8m・0.7m・1.2mで総長6.0m、梁行が西妻で、南から1.6m・1.7mで総長3.3mである。建物の方向はN-11°-Wである。柱穴は方形を基調としたもので、一辺が約40～80cmある。深さは南側柱列では20～30cmあり、埋土は黒褐色のシルトに地山がブロック状にまじる。



第4図 SB-220建物跡



第3図 第17次調査区構造配置図



第5図 SB-152a+b,246建物跡

SB-152 a 建物跡（第5図）

北側調査区の南東部に位置する。平成元年度の13次調査で西側部分が検出されていたもので、今回北半分が検出された。桁行5間、梁行2間以上の東西棟掘立柱建物跡で、桁行の南側柱列は調査区外へと延びる。SB-246建物跡を切っており、この建物を側柱列の柱筋をそろえたまま西に2間分移動して立て替えた建物と考えられる。また、SB-152 b 建物跡に切られており、新旧関係はSB-246→SB-152 a→SB-152 bとなる。柱痕跡の位置はSB-152 b 建物跡とほぼ同位置で重複するため検出されなかったが、柱穴の中心の位置をもとにすると柱間寸法は桁行が北側柱列で東から6.2m（2間分）・3.0m・3.0m・3.2mで総長15.4m、梁行が東妻で3.2m以上ある。建物の方向はN-8°-Wである。柱穴は残存部から隅のしっかりした方形を呈する考えられる。埋土中からは焼土・炭化物などは検出されなかった。

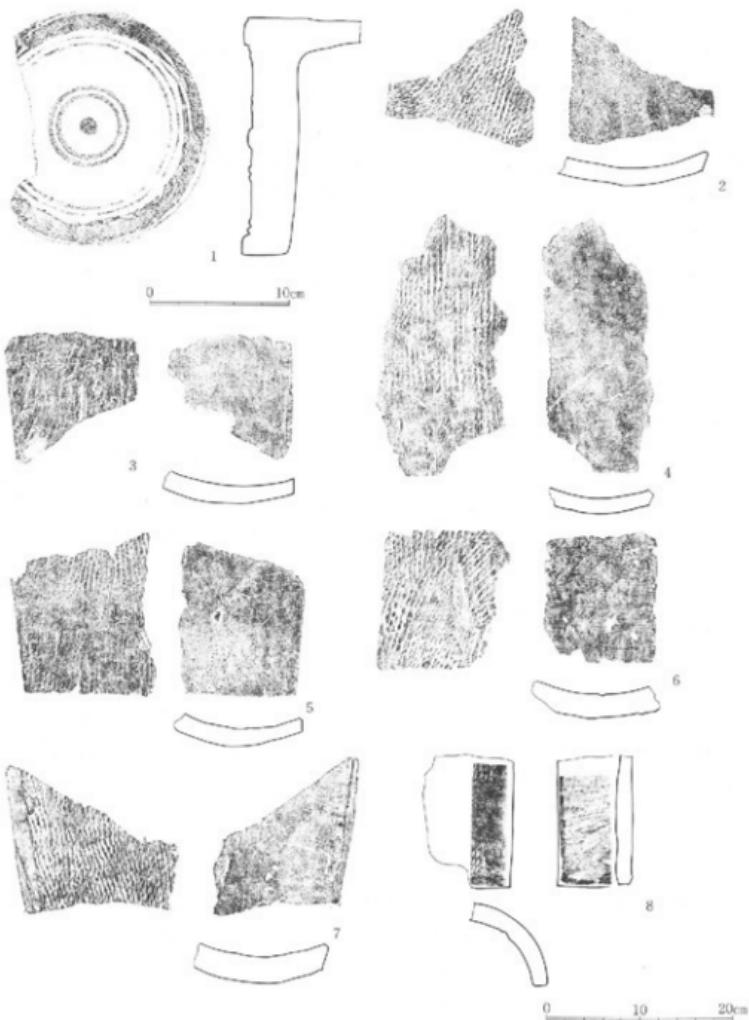
SB-152 b 建物跡（第5、6図）

北側調査区の南東部に位置する。SB-152 a 建物跡と同様に今回北半分が検出された。桁行5間、梁行2間以上の東西棟掘立柱建物跡で、SB-152 a 建物跡を同位置に同規模で建て替えたものである。SB-246建物跡とSB-152 a 建物跡をそれぞれ切っておりこれらよりも新しい。東妻のP1.2と北側柱のP5.7からは柱痕跡が認められ、それ以外の柱穴からは柱抜き取り穴が認められた。柱は円形で直径30~40cmある。柱痕跡および柱抜き取り穴の位置をもとにすると柱間寸法は桁行が北側柱列で東から6.2m（2間分）・3.0m・3.0m・3.2mで総長15.4m、梁行が東妻で3.2m以上ある。建物の方向はN-8°-Wである。柱穴は一辺が150~170cmの隅の丸い方形を呈し、深さは断ち割りを行った北側柱のP4.5では約80cmある。埋土は黄褐色土と暗褐色土の粗い互層で、多量の焼土、炭化物、焼壁、瓦片などが混入するが、柱痕跡および柱抜き取り痕の埋土には焼土、炭化物などはほとんど含まれていなかった。

また、SB-152 a、SB-152 b のどちらの建物に伴うのかは不明であるが、これらの建物跡を取り囲むようにSD-225溝跡が検出されている。この溝はこれらの建物の柱列から約150cm離れた外側を巡るもので幅40~60cm、深さ約30cmあり、断面形はじ字形を呈する。底面は凹凸が顕著で、部分的に深い所も認められる。堆積土は褐色ないしは黒褐色のシルトで地山のブロックを多く含む。

SB-246建物跡（第5図）

北側調査区の南東部に位置し、北半分が検出された。西妻の部分は、位置的にみて平成元年度の13次調査で検出された柱穴が組み合うものと考えられる。桁行5間、梁行2間以上の東西棟掘立柱建物跡である。SB-152 a・b 建物跡にそれぞれ切られており、これらより古い。SB-



No.	種別 分類	場所	No.	種別 分類	場所
1	片瓦	表面久 灰瓦質	2	瓦	平日 内・外側均多 線:ケズリ
2	平瓦	平日 G. 鋼打目 + 線:帶目 線:ケズリ	3	瓦	平日 内・外側均多 線:帶目 + ケズリ
3	平瓦	平日 G. 鋼打目 + ケズリ 四:帶目 + ケズリ 線:ケズリ	4	瓦	平日 内・外側均多 線:帶目 + ケズリ
4	瓦	平日 G. 鋼打目 + ケズリ 四:帶目 + ケズリ 線:ケズリ	5	瓦	平日 内・外側均多 線:ケズリ

第6図 SB-152b建物跡P5出土遺物

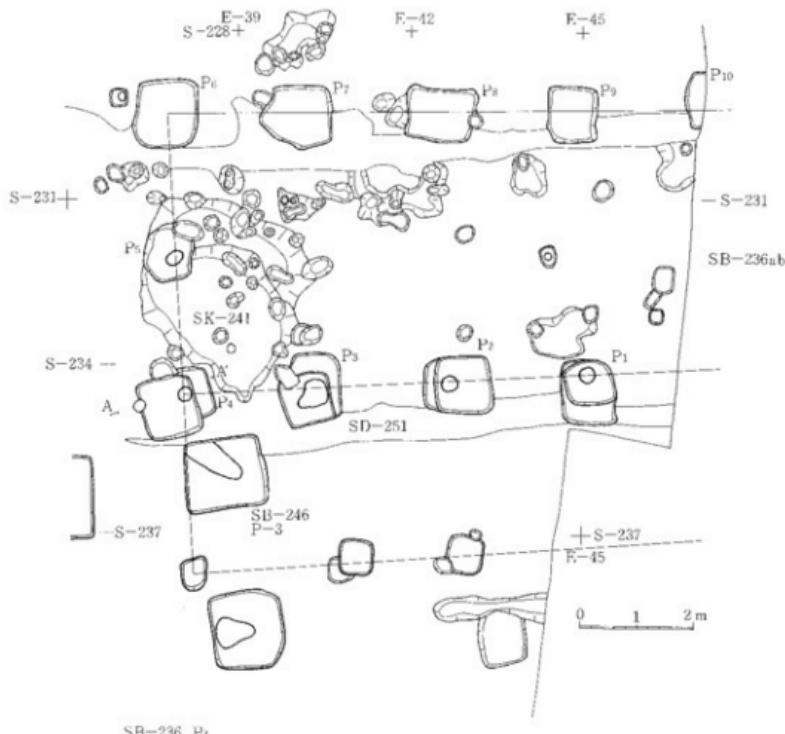
152a・b建物跡と重複しない西妻のP1から柱痕跡が、それ以外の東妻から北側柱にかけてのP5～P7からは柱抜き取り穴が認められた。柱は円形で直径30～40cmある。柱痕跡および柱抜き取り穴の位置をもとにすると柱間寸法は、桁行が北側柱列で東から3.2m・2.8m・6.0m（2間分）・3.0mで総長15.0m、梁行が東妻で3.1m・3.0mで総長6.1m以上ある。建物の方向はN-8°-Wである。柱穴は一辺が140～150cmの隅のしっかりした方形を呈し、深さは断ち割りを行った北側柱北東隅のP3では約70cmある。埋土は黄色土と暗褐色土の互層で、土中には焼上、炭化物などはほとんど含まれない。

SB-236a建物跡（第7図）

北側調査区の東端にある。SB-152建物跡の北東に位置する建物で、西半が検出された。桁行4間以上、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、南面に庇が付く。SB-236b建物跡と重複し、これに切られている。また、位置的にSB-246建物跡と重複する。新旧関係は、SB-246建物跡→SB-236a建物跡→SB-236b建物跡となる。SB-236b建物と同位置で重複するため、柱痕跡や柱抜き取り穴は検出されなかったが、柱穴の中心の位置をもとにすると柱間寸法は、桁行が北側柱列で西から2.4m・2.4m・2.4m・2.4mで総長9.6m以上、梁行は西妻で北から2.6m・2.6mで総長5.2mある。建物の方向はN-3°-Wである。柱穴は一辺が80cm～120cmの方形もしくは長方形を呈し、深さは断ち割りを行った南側柱南西隅のP4では約60cmある。埋土は褐色土と黒色土の互層で、焼上、炭化物などはほとんど含まれない。SB-236b建物と同位置で重複するため、柱痕跡や柱抜き取り穴は不明である。

SB-236b建物跡（第7図）

北側調査区の東端にある。SB-236a建物跡と同様に西半が検出された。SB-236a建物跡を同位置に同規模で建て替えたもので、桁行4間以上、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、南面に庇が付く。南側柱のP1,2,4からは柱痕跡が、P3からは柱抜き取り穴が認められた。それによると、柱は円形で直径約20cmある。柱痕跡や柱抜き取り穴の位置をもとにすると柱間寸法は、桁行が南側柱列は西から2.3m・2.4m・2.5m、北側柱列は西から2.4m・2.4m・2.4m・2.4mで総長9.6m以上、梁行が西妻で北から2.6m・2.4m・3.2mで総長8.2mである。建物の方向はN-5°-Wである。柱穴は一辺が90～100cmの方形を呈し、深さは断ち割りを行った南側柱南西隅のP4では約70cmある。埋土は褐色土と暗褐色土の互層で、焼土、炭化物が含まれる。

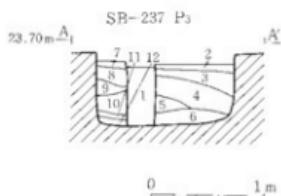
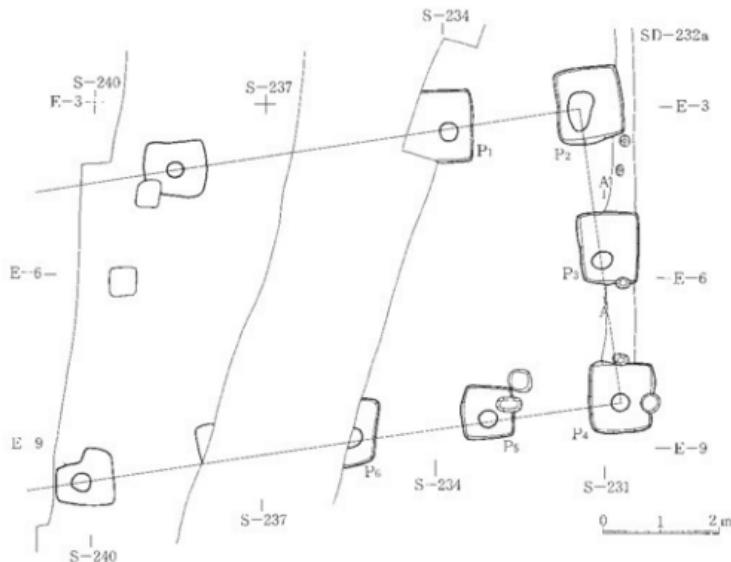


第7図 SB-236a・b建物跡

SB-237建物跡（第8図）

北側調査区中央の南側にある。SB-236建物跡の北側柱と北妻の柱筋をほぼ揃えた位置に建てられており、SB-236建物跡の西妻とSB-237建物跡の東側柱間の距離は約30mある。北半分が検出され、位置的に13次調査で検出された柱穴と組み合うものと考えられる。桁行4間以

上、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡となり、南妻の部分は調査区外に延びる。北妻北西隅のP2からは柱抜き取り痕が、他のすべての柱穴からは柱痕跡が認められた。それらによると、柱は円形で直徑約25cmある。柱痕跡の位置をもとにすると柱間寸法は、桁行が東側柱列で北から2.4m・2.4m・4.9m（2間分）で総長9.7m以上、梁行が北妻で東から2.6m・2.7mで総長5.3mである。建物の方向は、N-11°-Wである。柱穴は一辺が90~120cmの方形を呈し、深さは断ち割りを行った北妻北東隅のP4では約90cmある。埋土は褐色土と暗褐~黒色土の互層で、焼土、炭化物はほとんど含まれない。



No.	上色	下色	特徴
1	10YR 5/4 黄褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
2	10YR 5/2 黒褐色	シルト	堆山をブロック状に含む
3	10YR 5/4 黄褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
4	10YR 5/4 黑褐色	シルト	堆山をブロック状に含む
5	10YR 5/4 黄褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
6	10YR 5/4 黑褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
7	10YR 5/4 黑褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
8	10YR 5/4 黄褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
9	10YR 5/4 黑褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
10	10YR 5/4 黄褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
11	10YR 5/4 黑褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む
12	10YR 5/4 黄褐色	シルト	堆山をブロック状に多量に含む

第8図 SB-237建物跡

SB-243 a 建物跡（第9、10図）

北側調査区中央のやや東寄りにある。妻の部分をSB-152 a 建物跡の東西妻と柱筋をほぼ揃えた位置に建てており、SB-152 a 建物跡の北側柱とSB-243 a 建物跡の南側柱間の距離は約12mある。桁行5間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、SD-226.227溝跡、SB-243 b, 244 a・b 建物跡と重複し、前2者を切り、後3者に切られている。したがって新旧関係は、SD-226溝跡・SD-227溝跡→SB-243 a 建物跡→SB-243 b 建物跡→SB-244 a 建物跡→SB-244 b 建物跡となる。南側柱のP5からは柱抜き取り穴が認められたが、他の柱穴は他の建物との重複のため認められなかった。柱は円形で直径約25cmある。柱抜き取り穴や柱穴の中心の位置をもとにすると柱間寸法は、桁行が5間の中で中央の3間目が他の柱間よりも約60cm広く、南側柱列で東から3.0m・3.0m・3.6m・3.0m・2.8mで総長15.4m、梁行が西妻で北から2.4m・2.4mで総長4.8mである。建物の方向は、N-6°-Wである。柱穴は一辺が80~120cmの方形もしくは長方形で、深さは断ち割りを行った北側柱のP13では約60cmある。埋土は黄褐色土と暗褐色土の互層で、焼土、炭化物はほとんど含まれない。

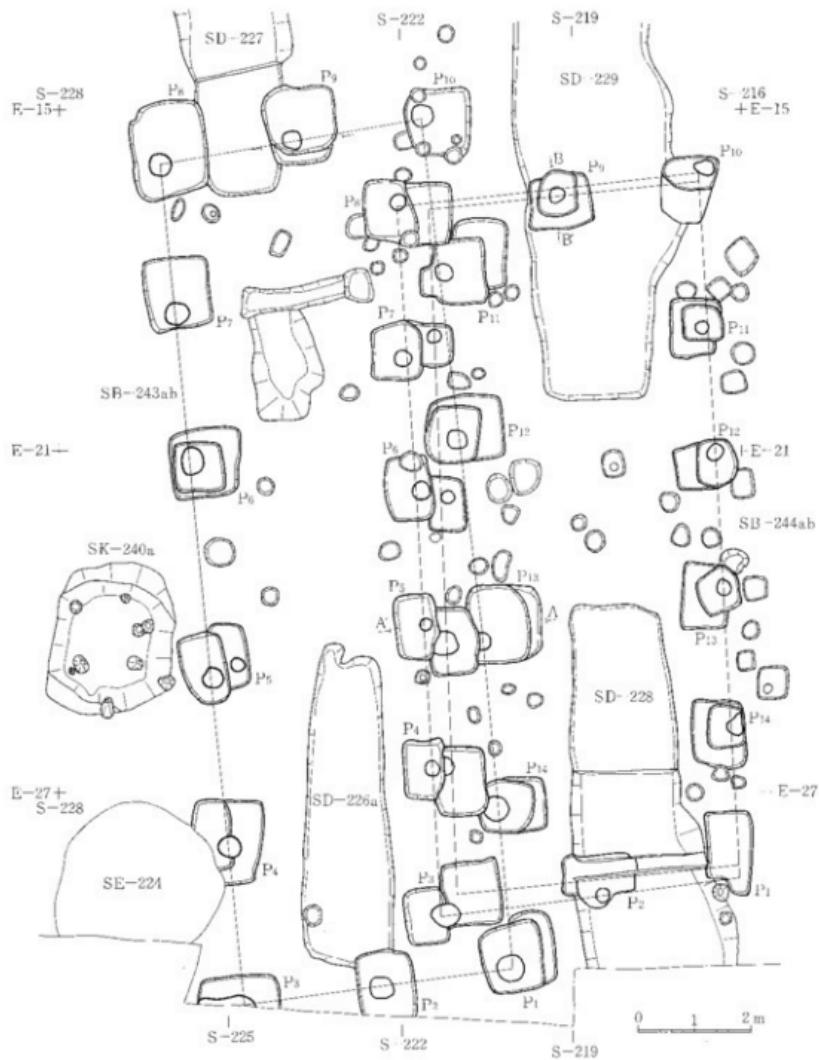
SB-243 b 建物跡（第9、10図）

北側調査区中央のやや東寄りにある。桁行5間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、SB-243 a 建物跡を同位置に同規模で建て替えたものである。SB-243 a 建物跡を切り、SB-244 a・b 建物跡に切られている。東妻のP1、東妻から北側柱にかけてのP8.10~13からは柱痕跡が認められ、それ以外の柱穴からは柱抜き取り穴が認められた。柱は円形で直径25~30cmある。柱痕跡および柱抜き取り穴の位置をもとにすると柱間寸法は桁行が5間の中で中央の3間目が他の柱間よりも約60cm広く、北側柱列で東から2.8m・3.0m・3.6m・3.0m・2.8mで総長15.2m、梁行が西妻で北から2.4m・2.4mで総長4.8mである。

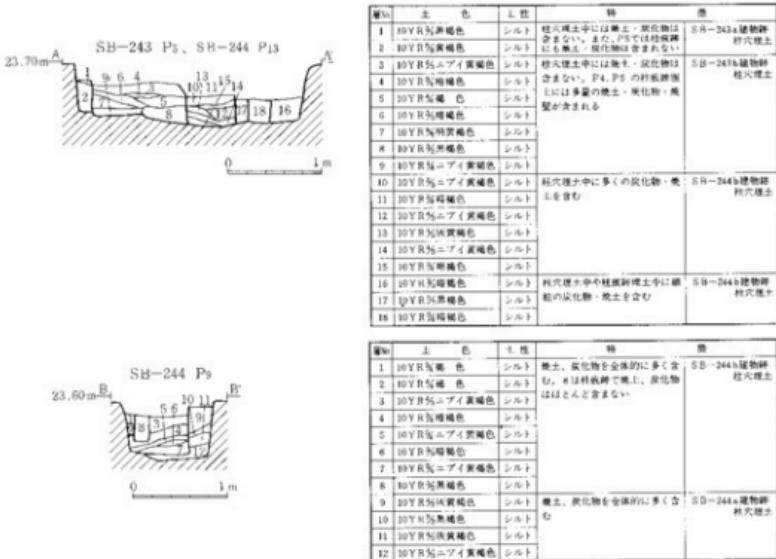
建物の方向はN-8°-Wである。柱穴は一辺が80cm~120cmの方形もしくは長方形を呈し、深さは断ち割りを行った南側柱のP7では約80cmある。埋土は黄褐色土と暗褐色土の互層で、焼土、炭化物などは混入しないが、柱痕跡および柱抜き取り穴の埋土には焼土、炭化物、焼壁が多量に含まれている。

SB-244 a 建物跡（第9、10図）

北側調査区中央のやや北寄りにある。桁行5間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、SB-243 b 建物の中心線を変えずに北に約2間分移動し、さらに建物の柱間寸法を縮小して建て替えたものとみられる。SD-228.229溝跡・SB-243 a・b 建物跡を切り、SB-244 b 建物跡に切られている。南側柱のP6.7からは柱痕跡が、P5からは柱抜き取り穴が認められた。柱は円形で直徑



第9図 SB-243a·b、244a·b建物跡



第10図 SB-243a・b, 244a・b建物跡

25~30cmある。柱痕跡および柱抜き取り穴の位置をもとにすると柱間寸法は、桁行が南側柱列で東から2.0m・2.4m・2.6m・2.8m・2.2mで総長12.0m、梁行が西妻で北から2.2m・2.2mで総長4.4mである。建物の方向は、N-4°-Wである。柱穴は一辺が60cm~120cmの方形もしくは長方形を呈し、深さは断ち割りを行った南側柱のP5では約80cmある。埋土は黄褐色土と暗褐色土の互層で、焼土、炭化物が多量に混入する。

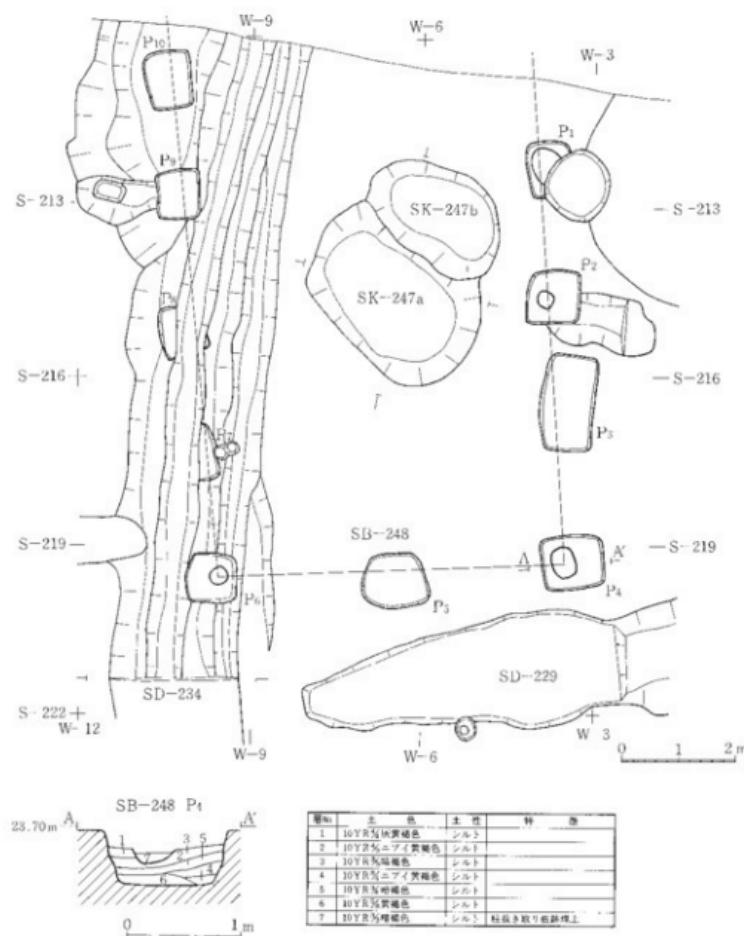
SB-244 b 建物跡（第9, 10図）

北側調査区中央のやや北寄りにある。桁行5間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡で、SB-244a建物跡を同位置で、梁を拡張して建て替えたものである。SB-243a建物跡、SB-243b建物跡、SB-244a建物跡をそれぞれ切っており、これらの中で最も新しい。南側柱のP4~P8と西妻のP9や北側柱のP11~13からは柱痕跡が、東妻南東隅のP3と西妻北西隅のP10、北側柱P14からは柱抜き取り穴が認められた。柱は円形で直径20~30cmある。柱痕跡および柱抜き取り穴の位置をもとにすると柱間寸法は、桁行が南側柱列で東から2.6m・2.6m・2.4m・2.4m・2.8mで総長12.8m、梁行が西妻で北から2.6m・2.8mで総長5.4mである。建物の方向はN-5°-Wである。柱穴は一辺が60cm~80cmの方形もしくは長方形を呈し、深さは断ち割りを

行った西窓のP9では約80cmある。埋土は黄褐色土と暗褐色土の互層で、全体にしまりがない。柱穴埋土や柱痕跡、柱抜き取り穴の埋土には焼土、炭化物の細粒が多く混入する。

SB-248建物跡（第11図）

北側調査区の北西部にある。桁行5間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡で、SD-229溝



第11図 SB-248建物跡

跡の北側に位置する建物である。南北に延びるSD-234溝跡に切られており、これよりも古い。西側柱のP5、東側柱のP9からは柱痕跡が、南妻南東隅のP7からは柱抜き取り穴が認められた。柱は円形で直径約25cmある。柱痕跡および柱抜き取り穴の位置をもとにすると柱間寸法は桁行が西側柱列で南から2.2m・2.2m・2.4m・2.0mで総長8.8m以上、栄行が西妻で北から3.0m・3.0mで総長6.0mである。建物の方向はN-5°-Wである。柱穴は一边が80~150cmの方形もしくは長方形を呈し、深さは断ち割りを行った南妻のP7では約60cmある。埋土は黄褐色土と暗褐色土のきれいな互層で、焼土や炭化物はほとんど混入しない。

② 築地跡（第3.12.13図）

築地本体や寄せ柱列は検出されなかったが、SD-230溝跡の堆積土上面から褐色土と黒色土が互層をなすブロック土が検出され、版築によって積まれた築地の崩壊土と考えられる。

一方、SD-226.227.228.229.230溝跡は平行してL字状にめぐる二重の溝で、大部分が掘り込まれた後にしまりのない黒色土で埋め戻されている。溝間の距離は上幅間で3.5~4mあり、これらの溝跡に挟まれた部分からは他の遺構が検出されていないことから、本来はこの部分に築地があったものと考えられる。溝跡は、大部分が埋め戻されている状況から、築地構築に用いる褐色土（地山ローム）を取るために掘られたものと考えられる。また、溝には同じ箇所で二条とも途切れている場所があり、この部分では築地が切れていたものと考えられる。なお、SB-243建物跡とSB-244建物跡の建物の中心線から築地の北西隅までの距離は約27m（¼町）ある。溝についての概要は以下のとおりである。

SD-226溝跡

SB-243建物の棟通りに沿って東側に延びる溝で、途切れる部分がある。SB-243a建物跡やSK-223土壤に切られており、これらよりも古い。長さは確認された部分で約16m、幅は120~150cm、深さは先掘した東側部分の深い所で約50cmある。埋土はしまりのない黒色土で地山のブロックを多く含んでいる。

SD-227溝跡

SB-243建物の棟通りに沿って西側に延び、さらに南側に曲がる溝である。SB-243a建物跡やSK-231土壤に切られており、これらよりも古い。長さは確認された部分で約28m、幅は2~3mで一定しない。断面形状は皿状を呈し、深さは約40cmある。埋土はしまりのない黒褐色もしくは褐色のシルトで地山のブロックを多く含んでいる。また、上面には炭化物や焼土粒が多く含まれる。

SD-228溝跡

SD-228溝跡と対になり北側（外側）に位置する溝で、SB-244建物の棟通りに沿って東側

に延びる。SB-244a建物跡やSK-233上壙に切られており、これらよりも古い。長さは確認された部分で約21m、幅は2～3mである。埋土はしまりのない黒色土で地山のブロックを多く含んでいる。

SD-229溝跡

SD-227溝跡と対になり北側（外側）に位置する溝で、SB-244建物の棟通りに沿って築地の北西隅の部分まで西側に延びる。SD-245溝跡を切り、SB-244a建物跡によって切られたり、新旧関係はSD-245溝跡→SD-229溝跡→SB-244a建物跡となる。長さは確認された部分で約28m、幅は2～3mで一定しない。深さは完掘した地点では約60cmある。埋土はしまりのない黒褐色のシルトで、上面に自然流入土と考えられる黄褐色のシルト（1層）が堆積している。1層は西側に向かって厚さを増すことから、西端にかけては土取り後の埋め戻しが完全ではなかったものと考えられる。

SD-230溝跡

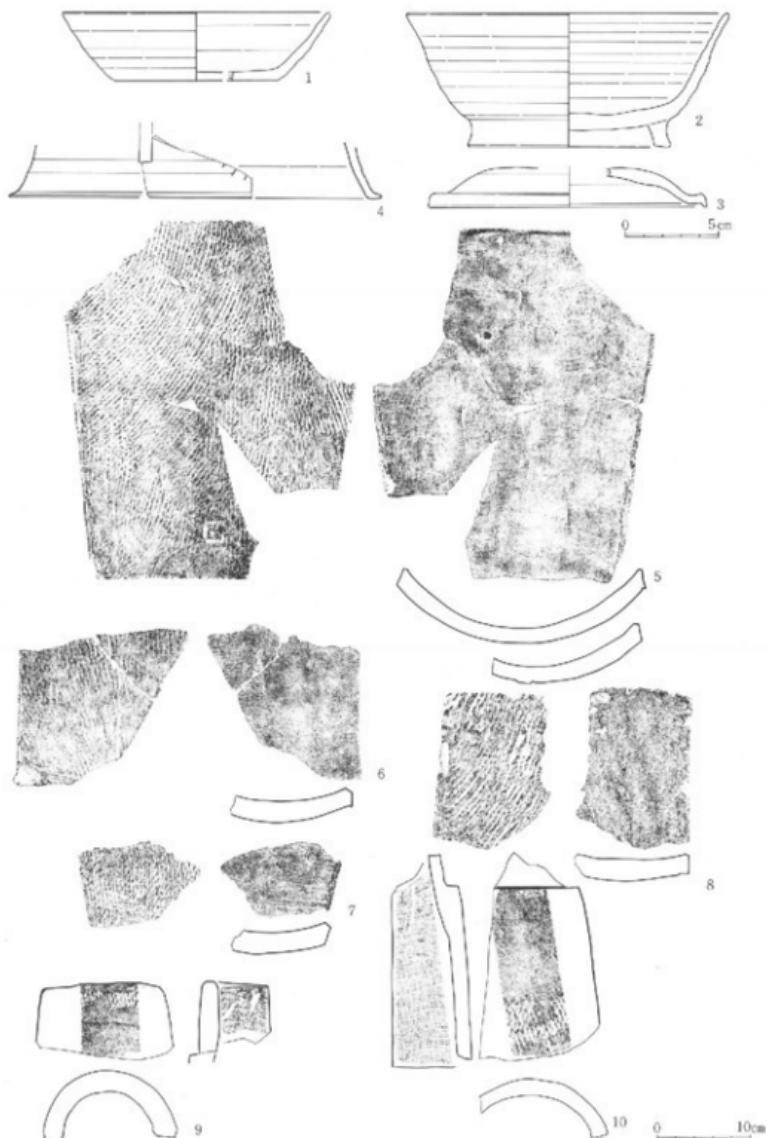
築地の北西隅から南側に延びる溝で、SD-227溝跡の南側部分に対応する。SD-232溝跡やSD-234溝跡に切られておりこれらよりも古い。長さは確認された部分で約28m、幅は2m以上ある。埋土はしまりのない黒色のシルトである。築地の崩壊土は溝の南側の地点で2箇所認められた。いずれも埋土の黒色シルトの上面から検出されており、土取り後の埋め戻しが完全ではなかったものと考えられる。崩壊土の大きさは一辺1～1.5m、厚さ約10～15cmあり、築地の表面が剥離したような状況で入り込んでいる。崩壊土は黄褐色土と黒色土のきれいな縞状を呈し、それぞれの厚さは1～5cmほどある。

③ 円形周溝墓（第3図）

SD-245円形周溝墓

調査区北西部にあり、地山面で検出された。SD-229溝跡と重複し、これらよりも古い。周溝の直径は溝の外側で計測すると7.5～8mあり、南北に若干長い。溝の幅は50～90cmで、深さは5～15cm、断面形は皿状で底面は凹凸はあまり見られない。堆積土は暗～黒褐色のしまりのない土で自然流入土である。遺物は認められなかった。

このような円形周溝はこれまでの調査でSD-102,138,163,181などいくつか検出されおり、とくにSD-163では溝で囲まれた部分の中央から主体部と考えられる方形の土壙が検出され、円形周溝墓であったと考えられている。SD-245では土壙など主体部と考えられるような施設は検出されていないが、SD-163などと同様に円形周溝墓もしくは、盛土の削平された小円墳であったと考えられる。



第12図 SD-227溝跡出土遺物

④ 井戸跡

SE-219井戸跡

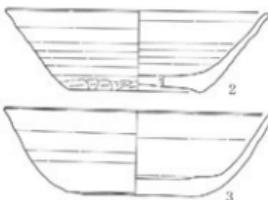
SB-220建物跡と重複しているが、切り合いはなく新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形で、規模は直径約1.8mある。確認面から約60cm掘り下げた時点で湧水が著しくなり完掘はしていない。

No.	層	種別	分類	口径	底径	高さ	基盤	調査
1	1	須恵器・环	Ⅲ	14.4	8.7	3.7	内側:クロロナダ 底:鉄ヘラ切り	
2	1	須恵器・馬糞灰瓦	Ⅰ-A	17.2	10.8	7.2	内側:クロロナダ 底:不規+鉄ヘラ+馬糞灰瓦	
3	1	須恵器・縁	Ⅲ	14.8	—	—	内側:クロロナダ 底:鉄ヘラ	内側:クロロナダ
4	1	円筒形	—	—	—	25.0	内側:クロロナダ	底:円形の芯
No.	層	種別	分類	口径	底径	高さ	基盤	調査
5	1	平瓦	凸:磚型 Ⅱ 内:布目+ナデ	方形突出	8	1	土系	凸:須恵器 底:布目+ナデ 鉄ヘラ
6	1	平瓦	凸:磚型 Ⅱ 内:布目+ナデ	縁:ケヅリ	9	1	土系	凸:須恵器+ロクロ 底:布目 鉄ヘラ
7	1	平瓦	凸:磚型 Ⅱ 内:布目+ナデ	底:便り鉄	10	1	土系	凸:須恵器+ロクロ 底:布目 鉄ヘラ

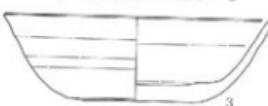
SD-227溝跡出土遺物(表)



SD-234 溝跡

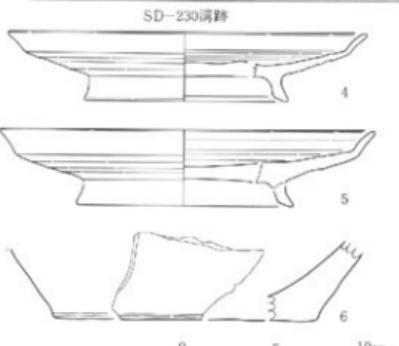
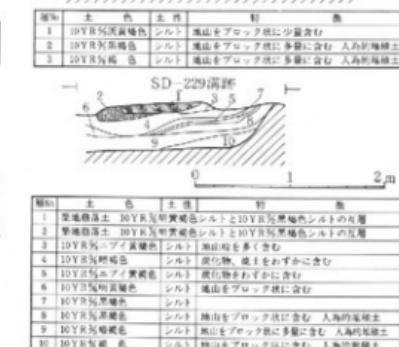


SD-235 溝跡

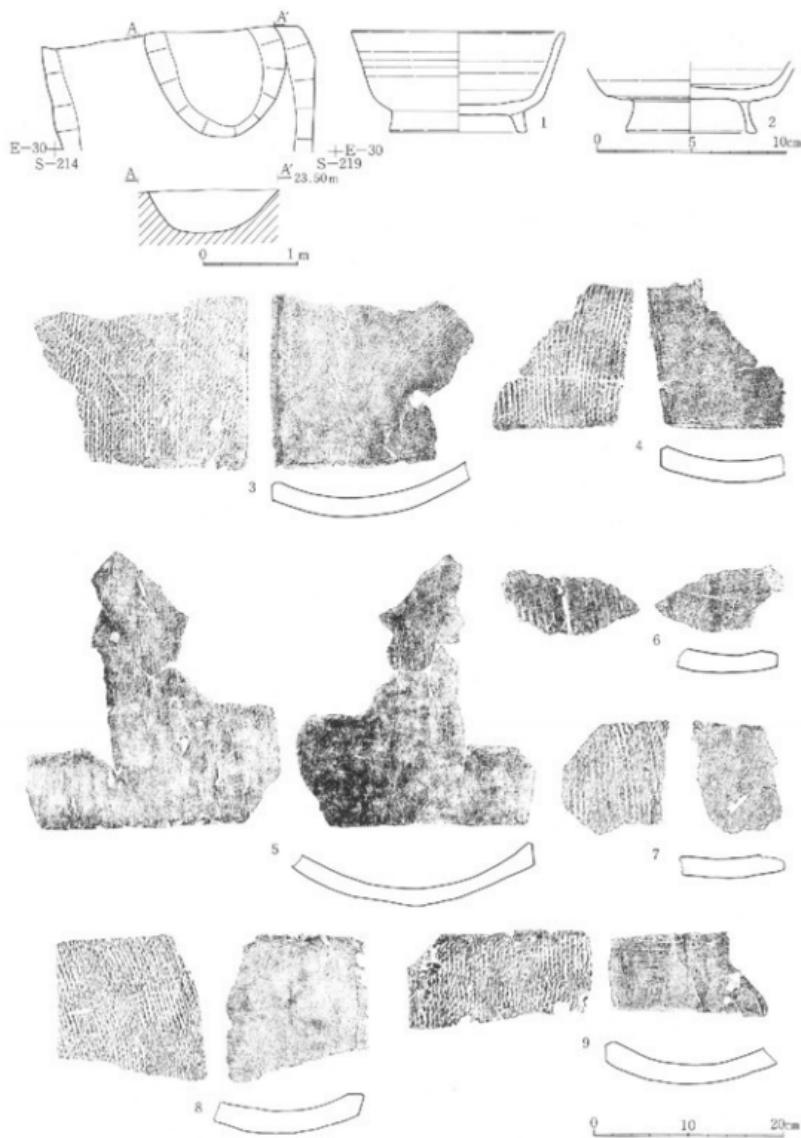


SD-237 溝跡

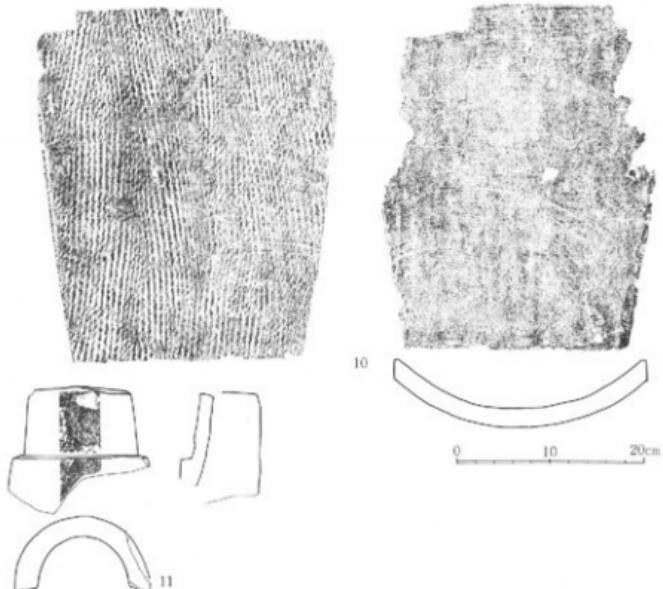
No.	遺物・部位	器種・断片	分類	口径	底径	高さ	基盤	調査
1	SD-229-1	須恵器・环	I	13.7	7.0	4.6	内側:クロロナダ 底:下鉄ヘラケヅリ 底:不規+鉄ヘラケヅリ	
2	SD-229-1	須恵器・环	I	14.1	7.0	4.1	内側:クロロナダ 底:不規+鉄ヘラケヅリ	
3	SD-229-1	須恵器・环	Ⅲ	14.4	7.5	4.5	内側:クロロナダ 底:鉄ヘラ	
4	SD-242-1	須恵器・馬糞灰瓦	Ⅲ	19.2	10.8	3.7	内側:クロロナダ 底:鉄ヘラ	
5	SD-242-1	須恵器・馬糞灰瓦	Ⅲ	20.0	—	—	内側:クロロナダ 底:鉄ヘラ	
6	SD-234-2	中世陶器・瓶体	—	—	—	14.1	内側:ナデ	瓶底



第13図 溝断面図と出土遺物



第14図 SK233土壤と出土遺物(1)



No.	基盤	縁	内側	外側	表面	寸	
						幅	高さ
1	直円錐、高台付	IV-A	11.4	7.4	5.0	内:ロフロナゲ	底:斜へつ切り+付高台
2	直円錐、高台付	IV-A		6.0		外:ロフロナゲ+斜へつ切り	内:ロフロナゲ
3	平V、平II	凸:縫隙8 凹:海貝4ナマ	底:斜へつ切り			No.	縁
4	平V、平II	凸:縫隙8 凹:海貝4ナマ				1	平V
5	下V	凸:縫隙8+ケズリ 凹:ケズリ				2	平V
6	下V、平V	凸:ケズリ 凹:海貝4ナマ				3	平V
7	平V	凸:縫隙8 凹:海貝4ナマ	底:斜へつ切り			4	平V
						5	平V
						6	平V
						7	平V
						8	平V
						9	平V
						10	平V
						11	丸V
						12	丸V
						13	丸V
						14	丸V
						15	丸V
						16	丸V
						17	丸V
						18	丸V

第15図 SK-233土壤出土遺物(2)

SE-224井戸跡

SB-243建物跡と重複し、これを切っている。平面形はほぼ円形で、規模は直径約3mある。確認面から約70cm掘り下げたのみで、完掘はしていない。掘り進むにつれてすぼまっていくことから断面形は円錐形、もしくはロート形を呈していたものと考えられる。

SE-249井戸跡

平面形はほぼ円形で、規模は直径約3mある。耕作土の直下で検出されており、新しい遺構である可能性が高い。掘下げは行っていない。

⑤ 土 壤 (第14~18図)

調査区全体で11基の土壤が検出されている。これらの土壤は平面形や規模の特徴から、次の

2つのタイプに分類することができる。ここではタイプごとに記載をしていく。

A タイプ

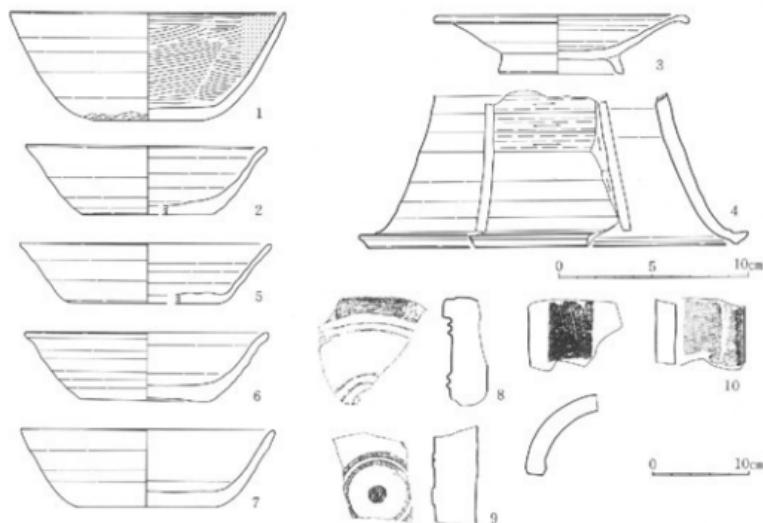
直径が1m程度で、円形もしくは長円形を呈し形が整い、しかも壁の立ち上がりがしっかりし、底面がほぼ平らなもの。

B タイプ

Aタイプよりも大形で、規模は長軸で2~3mある。平面形は不整で、しかも壁の立ち上がりがなだらかで、底面が皿状を呈するもの。

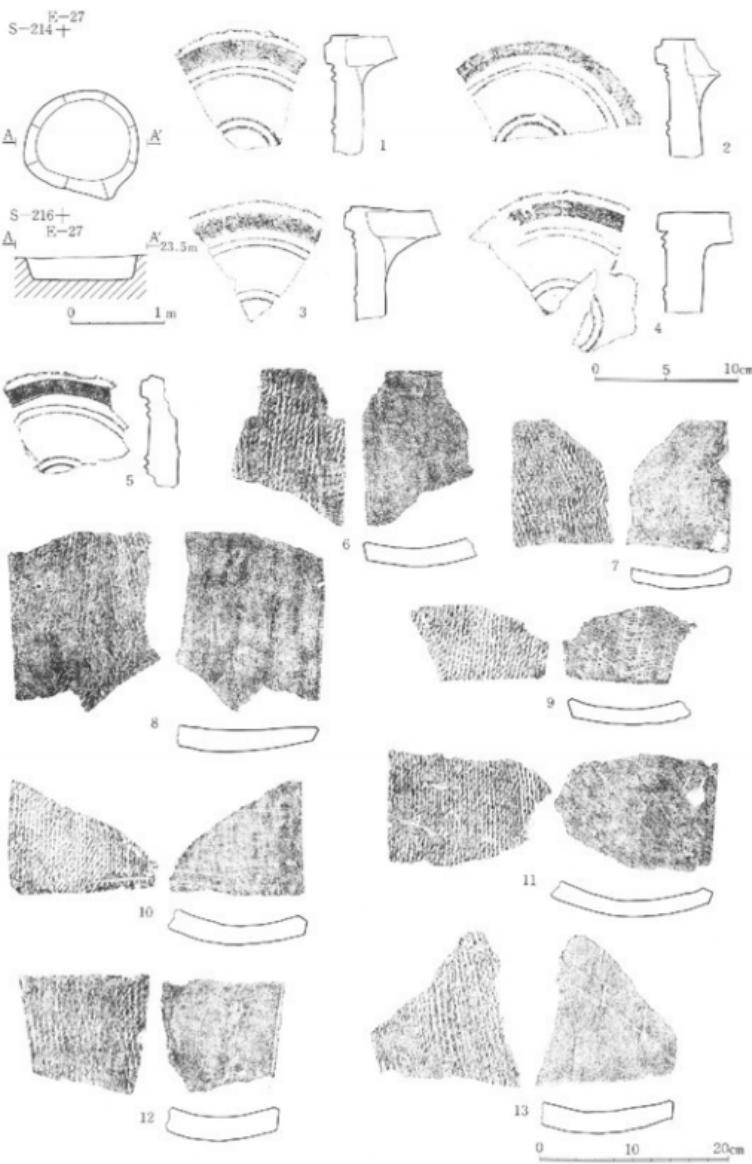
A タイプ

このタイプの土壙にはSK-233・SK-238がある。いずれの土壙からも瓦片や土器片が多量に出土おり、また堆積土には多量の炭化物や焼土が混入している。さらに、SK-233では焼壁の破片などもかなり認められることから、これらの土壙は火災により消失した建物の破損した瓦などを一括投棄するために掘られたものと考えられる。



No.	遺構・部位	種類・形状	分類	口径	直径	高さ	備考					
1	SK-240-1	上部器・杯	I	14.8	6.0	5.8	外:ロクロ+手ヘラケズリ 内:ミガキ+墨色、底:不明+手ヘラケズリ					
2	SK-240-1	頂部器・杯	II	13.0	7.0	3.6	内窓:ロクロ 底:墨色手彫り					
3	SK-240-2	頂部器・杯	V	13.7	6.7	3.2	内窓:ロクロ 底:墨色手彫り+仕面凸					
4	SK-240-2	内面鏡		20.6			外:ロクロ+墨ヘラケズリ 内:ミガキ+墨色處理					
5	SK-231-2	適合部・环	III	15.4	7.7	3.4	外:ロクロ+墨ヘラケズリ 内:ミガキ+墨色處理					
6	SK-231-1	適合部・环	II	13.1	6.8	3.7	内窓:ロクロ 底:墨色手彫り					
7	SK-231-1	適合部・环	III	13.6	7.3	4.2	内窓:ロクロ 底:墨色手彫り					
No.	遺構・部位	種類	分類	場	考	%	遺構・部位	種類	分類	場	考	
8	SK-240-1	新丸瓦	新丸瓦	瓦			10	SK-240-2	丸	二	瓦	瓦色+ロクロ 瓦:墨色 織:サボリ
9	SK-240-1	新丸瓦	新丸瓦									

第16図 SK-231・240土壙出土遺物



第17図 SK-238土壤と出土遺物 (1)

B タイプ

SK-223・SK-231・SK-235・SK-240a～f・SK-241・SK-247・SK-252・SK-253がある。

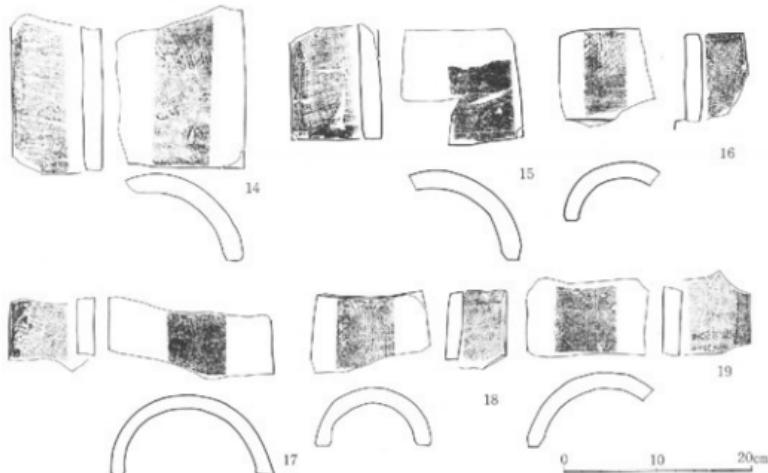
このタイプの土壤は平面形が不整で、しかも底面は凹凸が顕著である。堆積土はレンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積によるものと考えられる。

また、SK-231・SK-235・SK-240a～f・SK-241では上面に灰白色火山灰の堆積も認められている。土取りのために掘られた土壤の可能性がある。

⑥ 溝 跡

SD-232溝跡

東西溝で、東側と西側はさらに調査区外へと延びる。SB-237b建物跡、SK-241土壤跡、SK-241b土壤跡、SK-241b上坡跡、SB-237建物跡、SD-229溝跡、SD-230溝跡などの遺構を切っており、これらの中では最も新しい。幅50～70cm、深さ20～30cmで、堆積土はしま



No.	埋 穴	分類	場 所	No.	埋 穴	分類	場 所	場
1	1	砂土	重層文、瓦当部	11	1	瓦、瓦	平日	凸(窓)付
2	1	砂土	重層文、瓦当部	12	1	平、瓦	平日	凸(窓)付
3	1	砂土	重層文、瓦当部	13	1	平、瓦	平日	凸(窓)付
4	1	砂土	重層文、瓦当部	14	1	瓦、瓦	瓦(窓)付	瓦(窓)付
5	1	砂土	重層文、瓦当部	15	1	瓦、瓦	瓦(窓)付	瓦(窓)付
6	1	砂土	中日(窓)付	16	1	瓦、瓦	瓦(窓)付	瓦(窓)付
7	1	砂土	中日(窓)付	17	1	瓦、瓦	瓦(窓)付	瓦(窓)付
8	1	砂土	平田(窓)付	18	1	瓦、瓦	瓦(窓)付	瓦(窓)付
9	1	砂土	平田(窓)付	19	1	瓦、瓦	瓦(窓)付	瓦(窓)付
10	1	砂土	瓦(窓)付					

第18図 SK-238土壤出土遺物

りのない黒色土である。灰白色火山灰を切っている部分もあり古代以降の溝と考えられる。

SD-234溝跡

南北溝で、北側と南側はさらに調査区外へと延びる。SB-248建物跡、SD-230溝跡を切っており、これらよりも新しい。幅約3m、深さ約60cmあり、断面観察により2時期以上の掘り直しが認められた。堆積土は暗褐色から黒褐色のしまりのないシルトで、土中から中世陶器の擂鉢の底部が出土している。中世以降の溝と考えられる。

SD-242溝跡

東西溝で、築地構築の上取りのため掘られたSD-227溝跡の約4m南側に位置し、平行して走る。東側はさらに調査区へと延びる。幅1~1.2m、深さ約60cmある。堆積土は黒褐色のシルトで地山のブロックを多く含んでおり、人為的な埋土であると考えられる。

SD-227溝跡などと同様に土取りのため掘られた可能性もある。

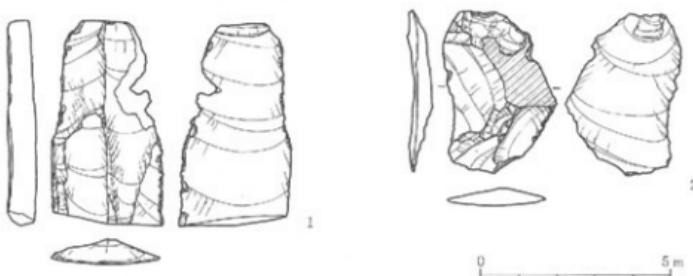
SD-250溝跡

東西溝で、北側と南側はさらに調査区外へと延びる。SB-246建物跡、SD-225溝跡、SB-152b建物跡を切っており、これらよりも新しい。確認された部分の長さは約12mで、幅約60cm、深さ約30cmある。堆積土は暗褐色から黒褐のしまりのないシルトで、炭化物や焼土が多く含まれている。性格などについては不明である。

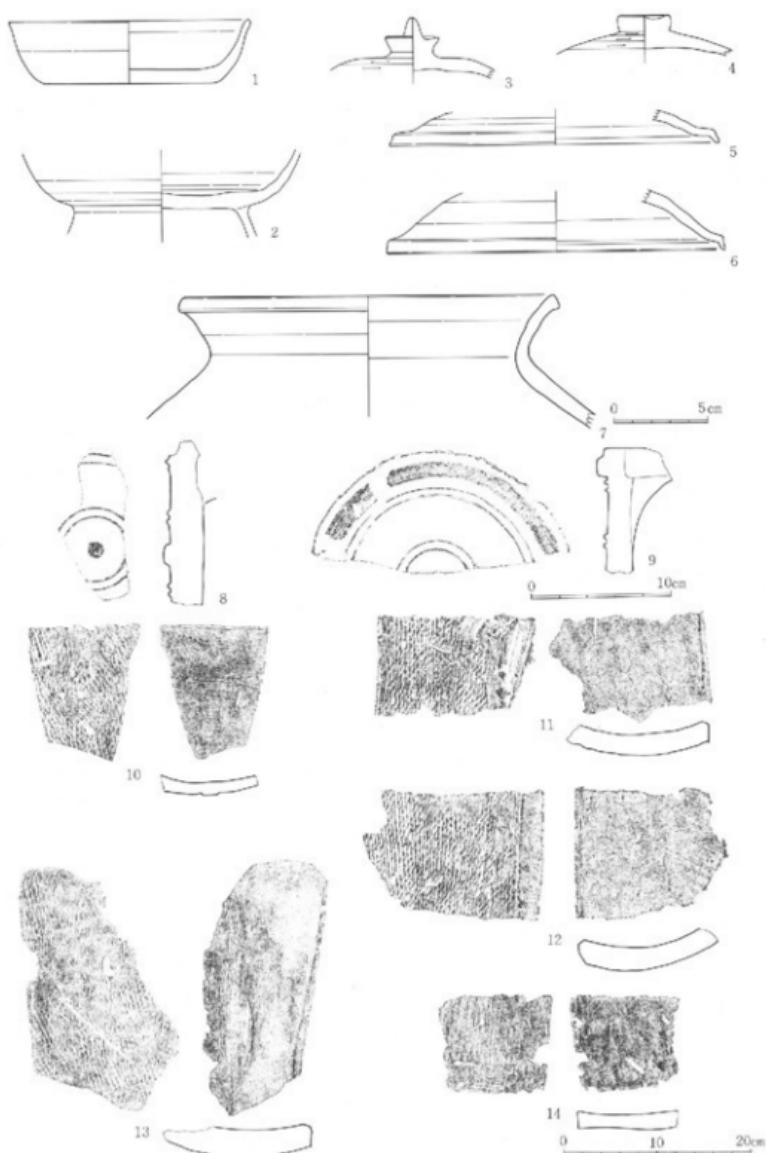
○遺構外出土遺物

1は珪質頁岩の石刃で両端が折れている。背面左辺に腹面と逆方向の剥離痕が、両側辺に微細な剥離痕が認められる。

2は珪質頁岩の剥片である。打面を剥離時の衝撃により欠損しているが、非常に薄く湾曲しており、背面に多方向からの剥離痕が認められる。両面加工石器の調整時に生じた剥片（いわゆるポイントフレイク）と考えられる。いずれも後期旧石器時代の所産と考えられる。



第19図 遺構外出土遺物(1)



第20図 造構外出土遺物 (2)

品種・器形	分類	口径	底径	高さ	備考
須恵器・环	I	12.4	8.6	3.4	内:ロクロナデ 外:ヘラ切り
須恵器・丸瓦円筒	II				内:ロクロナデ 外:ヘラ切り+頭ヘラケズリ
土器類・瓶	II				内:ロクロ+頭ヘラケズリ 内:ヘラ+ガキ+黒色処理
須恵器・盃	II				外:ロクロト脚ヘラケズリ 内:ロクロナデ
須恵器・盃	II	17.5			内:ロクロナデ
須恵器・盃	II	16.0			内:ロクロナデ
須恵器・盃	II	20.2			内:ロクロナデ
品種・器形	分類	口径	底径	高さ	備考
軒丸瓦	丸瓦型			12	平 瓦 平V 内:縫合き 四:右肩+ナデ 未切り版
軒丸瓦	丸瓦型			13	平 瓦 平V 口:縫合き 四:ケズリ
平 瓦	平V	16.0	11.5	2.5	口:縫合き 四:右肩+ナデ 方形突出
平 瓦	平V	14.0	10.0	2.5	口:ケズリ 四:ケズリ
平 瓦	平V	12.0	8.0	2.5	口:縫合き 四:右肩+ナデ

遺構外出土遺物(2)

IV. 考察

今回検出した遺構には掘立柱建物跡11・築地跡・円形周溝墓1・井戸跡3・上壙11・溝跡10などがあり、出土遺物には土器師器・須恵器・中世陶器・瓦・円面鏡などがある。

ここでは、まず出土した瓦について述べ、続いて検出された遺構の全体的構成や配置について検討していく。

① 出土瓦の検討

今回の調査では、過去の調査に比べて非常に多量の瓦が出土している。これらの瓦の多くはSK-233, SK-233, SK-238などの上壙やSB-152 b建物跡P5柱埋土、SD-227溝跡堆積土から焼土・炭化物・焼壁とともに出土したもので、とくに上壙出土のものは火災にあって焼けた建物の瓦を一括投棄したものと考えられる。瓦はこれらの遺構を中心に平箱で約15箱出土しており、今回はこの中で代表的なもの51点を選び図示した。

以下瓦の種類ごとに述べる。

○軒丸瓦

範による重圓文軒丸瓦が1種類みられる。SB-152 b建物跡P5から1点、SK-238上壙から5点、SK-240上壙と表土から各2点の計10点が出土しており、いずれも同範である。

これは瓦当面に二本単位の圓線を二重に巡らせたいわゆる「複線重圓文軒丸瓦」で、直徑は約18cm、厚さは2~3cmある。圓線の幅は約4mmとやや太めで、蓮子は約13mmと小さめである。瓦当面の中心部が残るものには、すべてに蓮子が認められる。板材による範の圧痕と考えられる微細な線状痕が認められるものもある。周縁はすべて無文の直立縁である。範への粘土の詰め方は周縁部に粘土紐を詰め、その後粘土板を2~3枚詰め込んでいる。丸瓦との接合方

法は丸瓦の端部を直接瓦当裏面に接着し、内面に粘土を詰め込んで補強しているものである。瓦当裏面にはナデやヘラケズリ、瓦当側面にはヘラケズリの調整が施されている。接合された丸瓦は、ロクロ調整後2分割したもので、瓦当に近い部分にはヘラケズリの調整が加えられている。

これらの瓦と類似するものは、多賀城政府Ⅱ期の240～243類にみられる。多賀城出土の瓦と今回出土した瓦を比較すれば、圓線の太さという点では伊治城出土のものは240.241.242類と比べて太く、蓮子も241.242類より大きい。また、243類とは圓線の太さでは類似するものの、243類は圓線の間隔が広く、蓮子が削り取られているという点では異なる。

○平 瓦

平瓦は最も多量に出土しているが、大部分は破片である。図示したものは全部で31点あるが、全体的法量のわかるものは1点のみである。大きさは広端部30.0cm、狭端部22.5cm、長さ37.5cmで形状は長方形にちかい縦長の台形を呈している。

瓦から観察される製作時の痕跡としては凸面に、糸切り痕、繩叩き目、ヘラケズリ調整、凹型台圧痕などがある。糸切り痕は方形の粘土塊から瓦の素材となる粘土板を切りとる際に生じる痕跡で、その後の叩き目や布目のために確認できないものもある。ヘラケズリ調整は繩叩き後に凸面全面に加えたもので、叩き目を完全に消し去っているものもある。凹型台圧痕については、凹型台の型の跡がそのまま残るものや、凹型台のほぞ穴の痕跡である「方形突出」などがある。また、凹型台を使用した結果として残ると考えられる「繩叩き日のつぶれ」の観察されるものもあり、図示したものの中ではいずれかの痕跡がすべての瓦に認められた。

凹面に残る痕跡は糸切り痕、布目痕、ナデ調整、ヘラケズリ調整などがある。ナデ調整は部分的に加えられたものと、全面に加えられたものとがあるが、いずれもかるい調整で、布目を消し去るほどのものではない。ヘラケズリ調整は凹面全面に加え布目を完全に消しているものと側縁部にのみ加えられているものとがある。

これらの痕跡を凹面、凸面の組合せから次の5つに分類することができる。

- I. 凸面に繩叩き後の凹型台圧痕が認められるもので、凹面は布目痕のみ認められ側縁部にケズリ調整の加えられているもの。(4点)
- II. 凸面に繩叩き後の凹型台圧痕が認められるもので、凹面にはナデ調整、側縁部にケズリ調整の加えられているもの。(20点)
- III. 凸面に繩叩き後の凹型台圧痕が認められるもので、凹面の全面と側縁部にケズリ調整の加えられているもの。(3点)
- IV. 凸面にヘラケズリ後の凹型台圧痕が認められるもので、凹面はナデ調整され、側縁部にケ

ズリ調整の加えられないもの。(1点)

- V. 凸面にヘラケズリ後の凹型台圧痕が認められるもので、凹面の全面と側縁部にケズリ調整の加えられているもの。(3点)

これらの瓦は横骨痕や粘土の合わせ目が認められない点、瓦の側面が平に置いた状況ではほぼ垂直になっている点、すべての瓦の凸面から凹型台圧痕が認められ、しかも糸切り痕の残るもののみられる点から粘土板一枚作りによるものと考えられる。

また、これらの痕跡から瓦の製作方法について考えてみると、I～IIIは粘土塊から糸切りした粘土板を布を敷いた凸型台にのせて繩叩きし、その後布を敷かない凹型台に移して小口面や側面、側縁部にヘラケズリ調整を、凹面にナデ調整(II)やヘラケズリ調整(III)を施したものと考えられる。IV、Vについては粘土塊から糸切りした粘土板を布を敷いた凸型台にのせて繩叩きし、さらにヘラケズリを加えて叩き目を消した後布を敷かない凹型台に移し、IVは小口面や側面にヘラケズリ調整、凹面にナデ調整、Vは凹面全面と小口面、側面、側縁部にヘラケズリ調整を加えたものと考えられる。

○丸 瓦

丸瓦は平瓦に次いで多く出土している。すべて小破片で全体的法量のわかるものは出土していない。図示したものは11点ある。丸瓦はすべて切縁の付く有段式のもので、断面は半円形を呈する。丸瓦から観察される製作時の痕跡としては凸面には繩叩き目、ロクロナデ調整、ヘラケズリ調整などが、凹面には粘土紐巻き上げ痕、布目痕、ヘラケズリ調整などが認められ、繩叩き→ロクロ調整→ヘラケズリ調整の順で行われている。以上のことから丸瓦の製作方法は、まず布を巻いた円筒型に粘土紐を巻き付け繩叩きして土管状の円筒を作り、その後ロクロ調整をして2分割し、小口面と分割面の側縁をヘラケズリ調整(面取り)している。側縁部のヘラケズリ調整は、凹面・凸面の両面に加えられているもの(I類)と、凹面にのみ加えられているもの(II類)とがあるが、ほとんどがI類である。

② 遺構について

○掘立柱建物跡の変遷(第20.21図)

今回の調査では11棟の建物跡が検出された。これらの建物跡の中でSB-152a・b建物跡、SB-236a・b建物跡、SB-243a・b建物跡、SB-244a・b建物跡はそれぞれ同位置での建て替えが行われたものである。また、SB-244a建物跡はSB-243b建物跡の北側柱の位置に南側柱が来るよう2階分化して建てられたもので、両建物を合わせればほぼ同じ場所で3回の建て替えが行われていたこととなる。さらに、SB-152a建物跡はSB-246建物跡の

位置から2間分西に移動して建てられた建物で、両建物を合わせればほぼ同じ場所で2回の建て替えが行われていたこととなる。

一方、これらの建物の中で、SB-152b建物跡・SB-244a建物跡・SB-236b建物跡の柱埋土や、SB-243b建物跡の柱痕跡からは焼土・炭化物・焼壁が多量に検出されており、ある時期に大規模な火災が発生したものと考えられ、建物の存在した時期はこの火災を挟んで大きく「火災前の建物群」「火災にあった建物群」「火災後の建物群」に分けることができる。さらに「火災後の建物群」の中でもSB-244a・SB-244b建物のように建て替えの認められるものもあることからこの時期はさらに細分されるものと考えられる。また、築地と建物との関係についてみると、築地構築のための土取り溝であるSD-227やSD-229の埋土がSB-243a建物跡の柱穴によって切られていることから、築地はSB-243a建物以前に存在していたものと考えられ、火災前についても2時期に細分することができる。以上から今回の調査区内では火災以前の建物群が2時期、火災にあった建物群、火災後の建物群2時期の計5期の変遷が認められる。

なお、遺構の重複および変遷は次のとおりである。

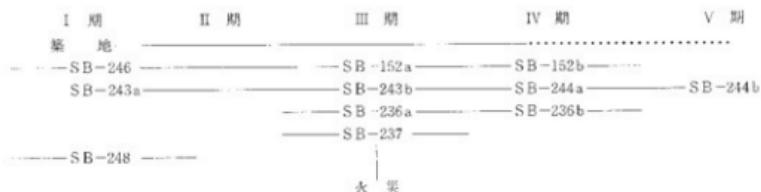


表1 建物の重複関係

重構名	構造	規 模 (m)	期別	そ の 性
SB-152a	東西棟	5間×2間以上	15.0×3.6以上	Ⅲ期 SB-246の西へ2間平行移動した位置に重複 瓦葺き
SB-152b	東西棟	5間×2間以上	15.0×3.0以上	Ⅳ期 SB-152aと重複 柱埋土に多量の焼土、焼壁、瓦
SB-236a	東西棟	4間以上×2間	9.6以上×4.8	Ⅲ期 南面に庇
SB-236b	東西棟	4間以上×2間	9.6以上×4.8	Ⅳ期 柱埋土に多量の焼土 南面に庇
SB-237	南北棟	5間以上×2間	12.0以上×5.4	Ⅲ期 13次調査で南側の一部検出
SB-243a	東西棟	5間×2間	15.0×4.8	Ⅰ期
SB-243b	東西棟	5間×2間	15.0×4.8	Ⅳ期 柱痕跡、柱抜き取り穴に多量の焼土、焼壁
SB-244a	東西棟	5間×2間	12.3×5.4	Ⅳ期 SB-243abの北側へ約2間平行移動
SB-244b	東西棟	5間×2間	12.3×5.4	Ⅳ期 SB-244aと同位置で建て替え
SB-246	東西棟	5間以上×2間	15.0×3.0以上	Ⅰ期 SB-152aと重複しこれより古い
SB-248	南北棟	5間以上×2間	8.8以上×6.0	Ⅰ期 築地外側の建物 前年検出のコ字形の宮衙域の一部？

表2 振立柱建物跡一覧

○遺構の構成と性格（第22図）

今回検出された建物の中で規模について判明するものは11棟中4棟ある。これらの建物はSB-243a・b建物とSB-244a・b建物跡でいずれも2間×5間の東西棟である。この中でSB-243a・b建物跡は築地の存在したと考えられる線上に北側柱がのる建物である。この建物の柱間寸法を見ると南側柱列は東から3.0m・3.0m・3.6m・3.0m・2.8mで、中央の3間目の柱間が他の柱間間隔とくらべて約60cm広くなっている。一方今回検出された建物の中でSB-243a・b以外の建物の側柱の柱間間隔はすべて7～10尺の等間となっており、建物の中央の柱間だけが広くなっているものはみあたらないことから、SB-243a・b建物は他の建物と構造を異にするもので、「門」である可能性が考えられる。

次に、SB-246.152a・b建物跡についてみてみる。この3棟の建物は、柱穴の規模が一辺150～180cmと非常に大きく、しかも柱痕跡をもとにして考えられる柱の太さも30～40cmと非常に太い。これに対し、他の建物は柱穴の規模が一辺約100cm程度で、柱についても20～25cmの範囲に収まるのが一般的で、これら3棟の建物跡が他と比べ非常に規模の大きな建物であったことがうかがわれる。さらに、SB-152b建物跡P5の埋土からは多量の瓦が出土していることをあわせれば、これら3棟の建物については瓦葺きであったものと考えられる。

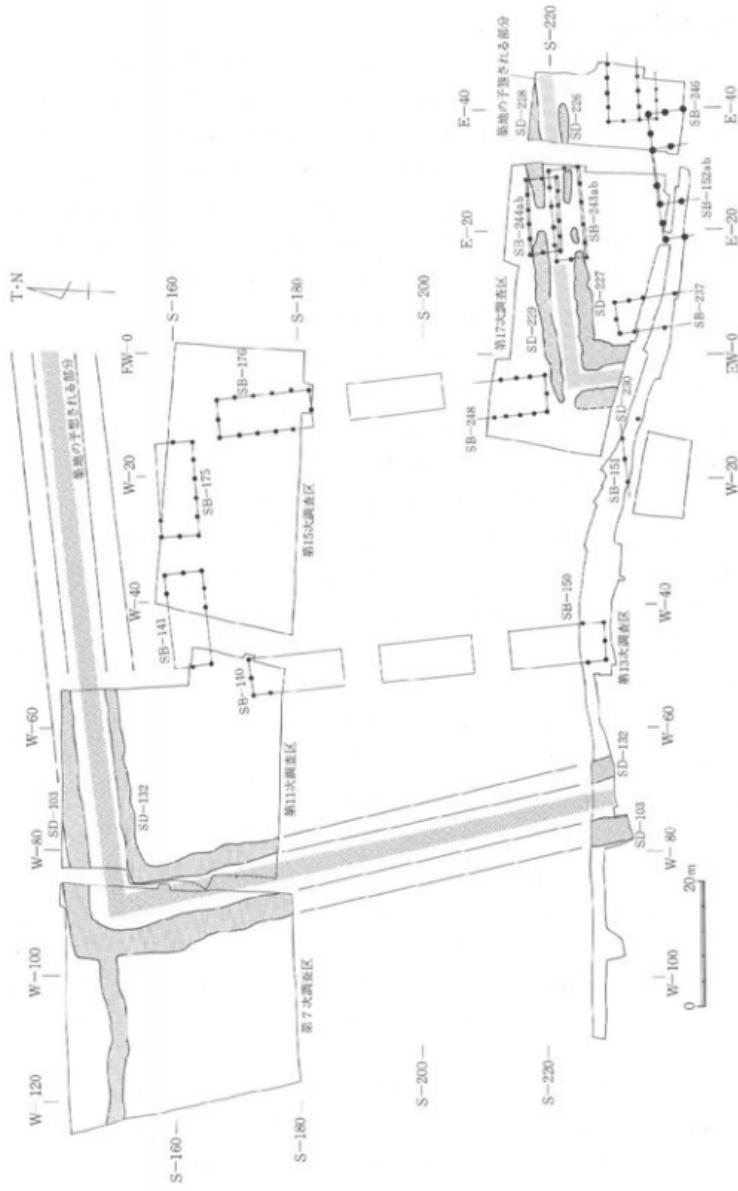
検出された遺構には5時期の変遷が認められ、築地はSB-243a建物構築以前に存在していたことは明かとなった。ここでは築地の存続期間について考えてみる。

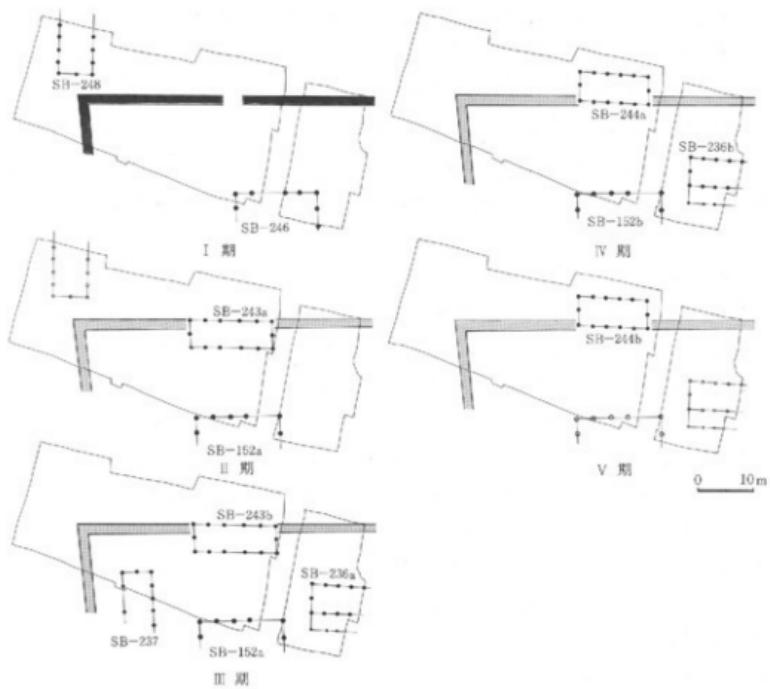
築地に取り付く建物については、築地が建物の棟通りに接続する例が一般的で、SB-243a・b建物のように北側柱で接続するような在り方は多少矛盾するが、本建物を門として考えた場合、この建物に取り付く他の遮蔽施設の痕跡（材木列跡、塀跡など）が認められないことから、築地とSB-243a建物は同時に存在したものと考えられる。

またSB-244a・b建物跡は側柱の柱間の間隔からみるとかぎり門とは断言できないものの、南側柱をSB-243a・b建物の北側柱と合わせるような位置に建て替えていることから、SB-244b建物の時期まで築地が存在していた可能性もある。

以上のように今回の調査では築地跡と、それによって区画された内部に建物群が検出された。これらの建物には5時期の変遷が認められたが、この中の多くからは重複関係認められており、建物群は基本的な配置を変えずに建て替えが行われていたものと考えられる。各時期の構成については以下のとおりである。

I期 この時期の遺構には築地跡・SB-246建物跡・SB-248建物跡がある。築地はSB-246建物跡の西妻を北に延長した部分で途切れているが、II期以降にはこの部分に門が取り付くことからI期でもこの部分には潜り門状の施設が存在していた可能性がある。





第22図 遺構変遷図

II期 建物の配置が大きく変化する時期である。この時期の遺構には築地跡・SB-152a建物跡・SB-243a建物跡がある。SB-152a建物はSB-246建物を西に2間分移動した建物である。また、SB-243a建物跡はSB-152a建物と妻の柱筋を揃えて建てられた門と考えられる建物で、門の中心の柱間が前段階で築地の途切れる部分と一致する位置に建てられている。

III期 火災が発生した時期である。II期の建物に加えて新たにSB-236a建物・SB-237建物が建てられ、SB-243a建物はSB-243b建物に立て替えられている。SB-236a建物は東西に、SB-237建物は南北に長い建物で、両者間の間隔はSB-236a建物の西妻とSB-237建物の東側柱で約30mある。

火災の時期についてはその後再建されたIV期の建物であるSB-152bのP5の柱穴埋土からは焼土、炭化物や焼壁と一緒に多賀城政府II期に比定できる重圓文軒丸瓦が出土してい

ることから、文献によれば宝亀11年(780)に起きたとされる「皆麻呂の乱」によるものと考えることもできる。

IV期 火災後に建て替えられた建物で、築地跡・SB-152 b 建物・SB-236 b 建物・SB-244 a 建物がある。SB-244 a 建物はSB-243 a 建物を北に2間分移動して建て替えた建物で、南側柱の部分で築地と接続するものと考えられる。

V期 SB-244 b 建物のみ確認できる。SB-152 b 建物などがこの時期まで継続して存在したかどうかは不明である。

最後にこれらの建物の性格について考えてみる。

今回の調査では築地に区画された内側に計画的に配置された建物群が存在することが明かとなった。一方、これまでの調査結果では、今回の調査区のさらに外側に二重の溝が検出され区画施設であると考えられていた。この溝は断面形が箱堀状を呈することや、今回検出された土取り溝と比べて整然と掘られている点、掘り直しが行われている点などに相違がみられるが、二条の溝が並行して巡る点や溝に挟まれた部分に他の遺構が存在しない点を重視すれば、この部分にも築地が存在していた可能性がある。とすれば、今回検出された建物群は二重の築地に囲まれた内部に配置されたことになり、特にSB-246建物・SB-152 a 建物・SB-152 b 建物などは他の建物と比べて柱穴の規模が大きく周辺から多量の瓦が出土していることから瓦葺きであったと考えられる建物も確認されていることから、これらの建物群は伊治城の中枢部=政府城を構成する建物であったと考えられる。

また、個々の建物の性格については政府全体の規模が確認されていないため不明であるが、政府の北側部分に配属された建物群の一部とみるとみることができよう。

V. ま と め

- 今回の調査では二重の築地によって区画された区域と、それらの内部に計画的に配置された建物群の存在が明らかとなった。とくに内側築地に囲まれた区域の中には瓦葺きの建物の存在も予想されることから、この区域が伊治城の中枢部＝政庁域であったと考えられる。
- 各建物の性格は、政庁の全体規模などが確認されていないため不明であるが、政庁の北側部分に配置された建物群の一部と考えられる。
- 遺構は重複関係から、5回の変遷をたどることができる。この中でⅢ期の建物は大規模な火災を受けており、その後再建されたⅣ期の建物であるSB-152bのP5の柱穴埋土の中からは焼土、炭化物や焼壁と一緒に多賀城政庁Ⅱ期に比定できる重圓文軒丸瓦が出土していることから、Ⅲ期の火災は時期的に「皆麻呂の乱」によるものと考えることもできる。
- 今回の調査では、政庁の北西部が検出されたのみで、政庁域はさらに南側および東側に広がるものと予想される。今後は政庁全体の規模や正殿など主要建物の検出を主眼とした調査を行っていく必要がある。

引 用・参 考 文 献

- 小川・小井川（1982） 「御駒堂遺跡」 宮城県文化財調査報告書83集 宮城県教育委員会
菊地 逸夫（1991） 「伊治城跡－平成2年度」 築館町教育委員会
菊地・吉田（1990） 「郡楽遺跡」 宮城県文化財調査報告書 134集 宮城県教育委員会
菊地・小川（1985） 「中峯遺跡」 宮城県文化財調査報告書 108集 宮城県教育委員会
工藤 雅樹（1989） 「城櫓と蝦夷」 ニューサイエンス社
佐藤・貞山（1987） 「観沢・大沢窯跡」 宮城県文化財調査報告書 116集 宮城県教育委員会
菅原 祥夫（1988） 「伊治城跡－昭和62年度概報」 築館町教育委員会
菅原 祥夫（1989） 「伊治城跡－昭和63年度概報」 築館町教育委員会
菅原 祥夫（1990） 「伊治城跡－平成元年度概報」 築館町教育委員会
宮城県多賀城跡調査研究所（1978） 「伊治城跡Ⅰ」 多賀城関連遺跡発掘調査報告 3書 宮城県多賀城跡調査研究所
宮城県多賀城跡調査研究所（1979） 「伊治城跡Ⅱ」 多賀城関連遺跡発掘調査報告 4書 宮城県多賀城跡調査研究所
宮城県多賀城跡調査研究所（1982） 「多賀城跡－政庁跡」 宮城県多賀城跡調査研究所
栗原 和彦（1990） 「九州における平瓦一枚作り」 九州歴史資料館研究論集15 九州歴史資料館

VI. 第 18 次 調 査

1 発見された遺構と遺物

発見された遺構は、竪穴住居跡1軒、溝7条、土壙6基などである（第23図）。いずれも地山のローム面で確認された。以下、順に説明する。

なお、本調査区は第12次調査区と隣接している。調査の成果は概略が公表されているが（菅原：1990）、本調査と関連のあるものについてはここで説明することにする。

SI-266竪穴住居跡（第23図）

4個の柱穴から推定したもので、壁や床面等は削平されている。SK-270土壙と重複しており、これより新しい。また、位置関係からSD-262・264・265溝とは同時に存在できないと考えられるが新旧関係は不明である。柱間は東西・南北とも3.5mで、柱穴は0.4m×0.8m程の隅丸長方形である。柱痕跡は直径15cm程の円形である。

SD-260・261溝（第23図）

L字形に折れ曲がる一連の溝である。

〔遺構の確認・重複〕 SD-260溝はほぼ東西方向の溝であり、長さ20mにわたって検出しており、東半部は削平されている。SD-264・265溝、SK-268・271土壙と重複しており、SK-271土壙より新しく、他のものよりは古い。

SD-261溝はほぼ南北方向の溝であり、長さ18mにわたって検出しており、南半部は削平されている。SK-272土壙と重複しており、これより新しい。

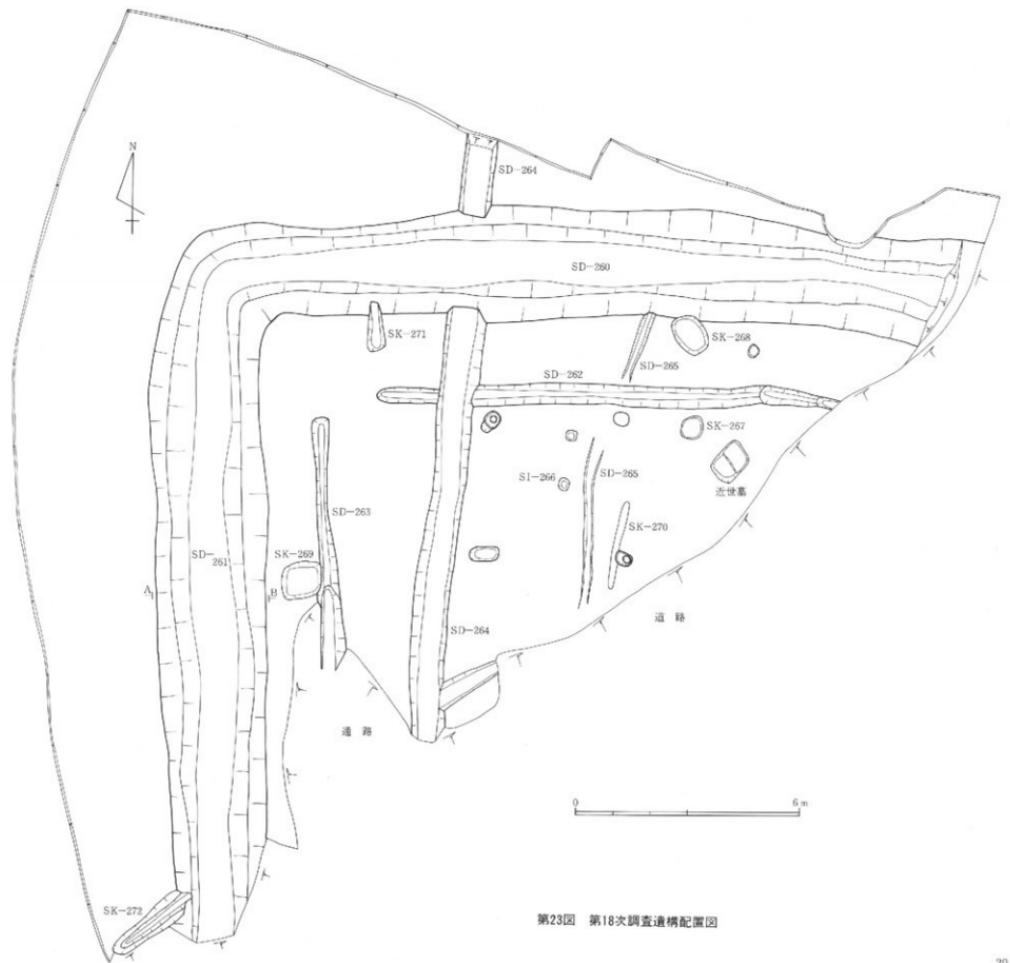
〔規模〕 両者とも上幅は2.3～3mで、下幅は0.7～1.2mであり、深さは最も深い部分で1.2m程度である。横断面形は逆台形である。

〔堆積土〕 3層に大別でき、1層は黒色の自然堆積土で、2層は地山ブロックを多量に含む崩落土である。3層は人為的に埋め戻された土で、上面は平坦であり、堅く締まっている（第24図）。

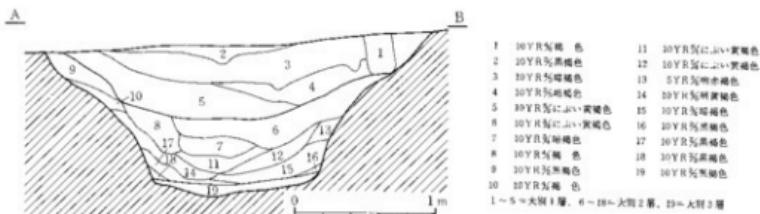
〔出土遺物〕 SD-260溝から縄文土器、弥生土器、土師器、北大式土器、石器、石製品が出土している（第25図）。このうち土師器は東端部の堆積土1層の下部から2層の上面にかけてまとまって出土した。器種には壺、壺、甕がある。

SD-261溝からは縄文土器、弥生土器、土師器、北大式土器、土製品、石製品、石器が出土している（第26～29図）。これらは南半部の堆積土1層の下部から2層の上面にかけてまとまって出土した。土師器には壺、高壺、器台、壺、甕などがある。北大式土器は深鉢である。

なお、堆積土3層の状況からこれらの溝が通路として使われた可能性が考えられる。



第23図 第18次調査遺構配置図



第24図 SD-261断面図

SD-262・263溝（第23図）

いずれもSD-260・261溝の内側にあり、それぞれこれらと平行している。

〔遺構の確認・重複〕 SD-262溝はほぼ東西方向の溝で、長さ12mにわたって検出しており、東半部は削平されている。SD-260溝とは約2m離れている。SD-264・265溝と重複しており、SD-264溝より古いが、SD-265溝との関係は木の根のため不明である。また、SI-266堅穴住居跡とは位置関係から同時には存在し得ないが、新旧関係は明らかではない。

SD-263溝はほぼ南北方向の溝であり、長さ7m分を検出したが、南半部は削平されている。SD-261溝とは約1.5m離れている。SK-269土壌と重複しており、これより古い。

〔規模〕 両者とも上幅は0.3~0.6mで、下幅は0.2~0.1mであり、深さは最も深い部分で0.3m程度である。横断面形はU字形で、底面は凹凸が激しく、円形に窪んでいる部分もある。

〔堆積土〕 2層に大別でき、上層は黒色の自然堆積土で、下層は地山ブロックを多量に含む人為的に埋め戻された土である。

〔出土遺物〕 少量の上師器の小片が出土した。

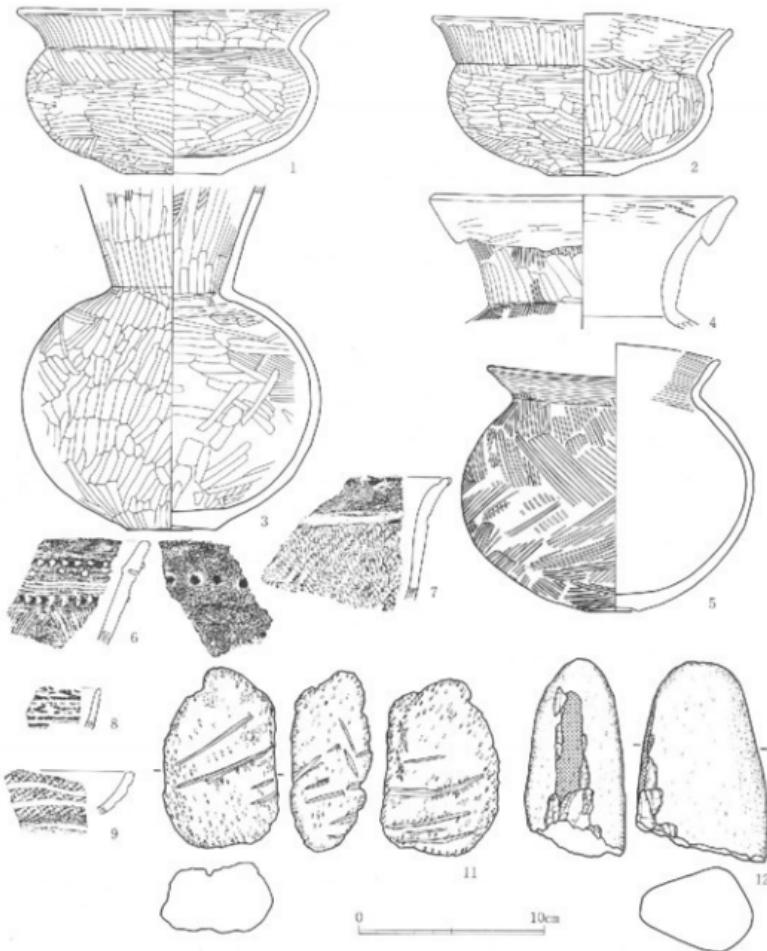
SD-264溝（第23図）

〔遺構の確認・重複〕 南北方向の溝で、長さ16mにわたって検出しており、北は調査区外に延びており、南側は削平されている。SD-260・262溝と重複しており、これらより新しい。また、SI-266堅穴住居跡とは位置関係から同時には存在し得ないが、新旧関係は明らかではない。

〔規模〕 上幅1m、下幅0.5m程度であり、深さは最も深い部分で0.3m程度である。横断面形は開いたU字形である。

〔堆積土〕 暗褐色のしまりのない自然堆積土である。

〔出土遺物〕 土師器が出土しているが、図示できるものはない。

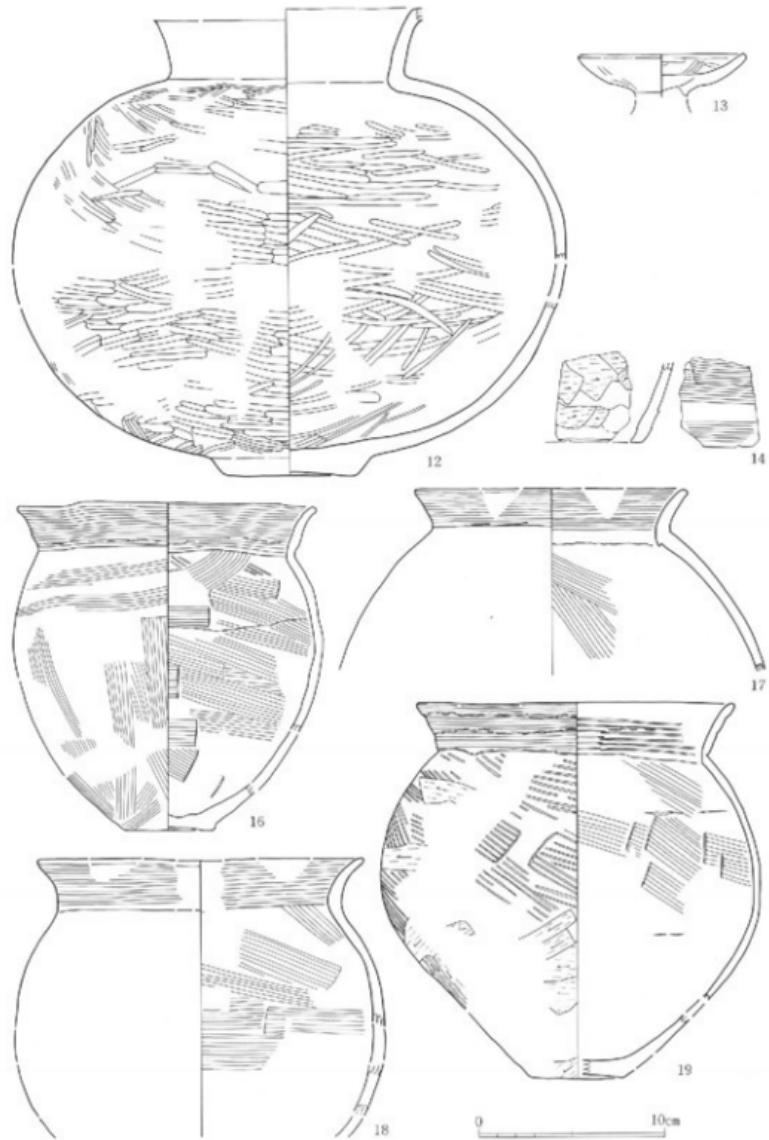


番号	種類	部位	特	標	備	出目番号	登録番号
1	土器部・环	1	内面:ケズリ→ミガキ 内面:ヘリナメ、ミガキ	口径16.0mm、底径3.2mm、厚肉8.5mm		12-3	P-1
2	土器部・环	2	内面:ミガキ 槌打面 内面:ヘリナメ→ミガキ	口径16.0mm、底径3.0mm、厚肉7.5mm		12-2	P-2
3	土器部・直	1	内面:ミガキ ハナツ 槌打面 内面:ナビ、オヤヌ、ヘリナメ→ミガキ	底部最大径16.0mm、底径4.5mm		12-4	P-4
4	土器部・直	2	内面:ハリメ→ミガキ 内面:ハリメ→ミガキ 面面荒しい	口径16.0mm		12-2	
5	土器部・直	2	内面:ハリメ→ミガキ 内面:ハリメ→ミガキ 面面荒しい	口径12.5mm、底径2.5mm、厚肉14.5mm		11-6	P-5
6	木大人形石像・頭部	1	表面:木大人形石像・頭部上半分	表面:木大人形石像・頭部上半分			
7	縄文土器・环	1	小破痕はね 山形記録文等 休根土立継文				
8	縄文土器・环	2	小破痕はね 不規則文?				
9	争生土器・直	1	自然打撃 平行打撃 LK幾文				
10	埴輪	1	軽ね重 全周部の方の板部 塗化している				
11	野猪磨石	1	手形 細い擦痕、削痕有				

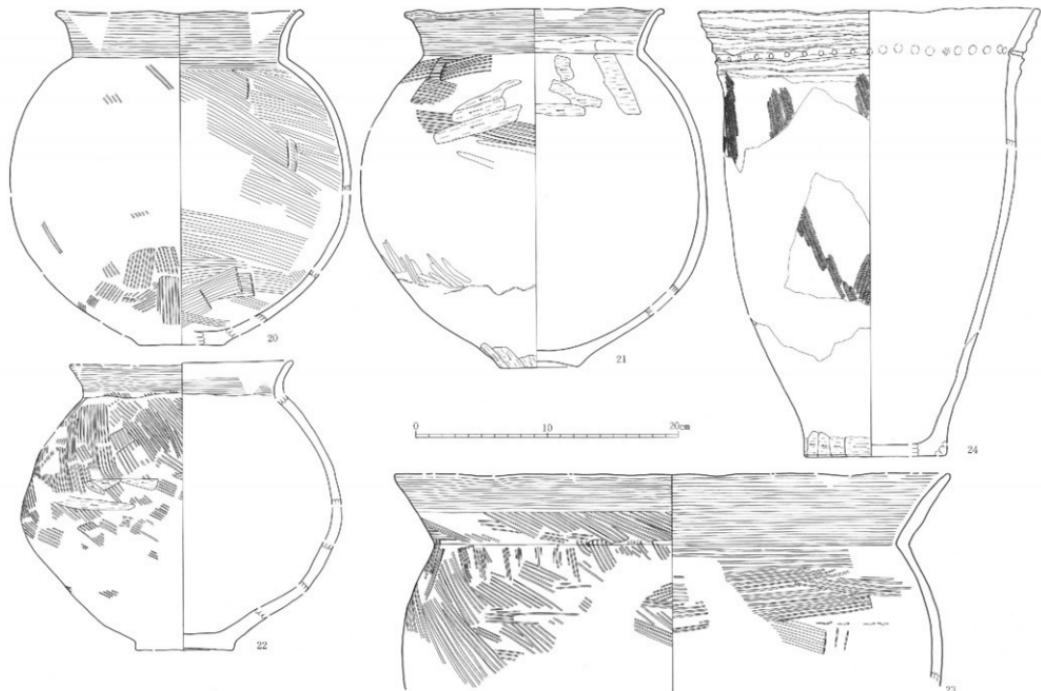
第254図 SD-260出土遺物



第26図 SD-261出土遺物(1)



第27図 SD-261出土遺物 (2)



番号	種類	部位	特徴	寸法	回収番号	回収年月	寸法	部位	特徴	寸法	回収番号	回収年月
1	土器底	残部	内面底: ハサミ	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-1	P-9	13	土器底	内面底: ハサミ	口径9.0cm	P-12	1977.11
2	土器底	残部	内面底: ハサミ	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-2	P-10	14	土器底	内面底: ハサミ	口径9.0cm	P-13	1977.11
3	土器底	残部	内面底: ハサミ	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-3	P-11	15	土器底	内面底: ハサミ	口径9.0cm	P-14	1977.11
4	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-4	P-12	16	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-15	1977.11
5	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-5	P-13	17	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-16	1977.11
6	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-6	P-14	18	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-17	1977.11
7	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-7	P-15	19	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-18	1977.11
8	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-8	P-16	20	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-19	1977.11
9	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-9	P-17	21	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-20	1977.11
10	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-10	P-18	22	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-21	1977.11
11	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-11	P-19	23	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-22	1977.11
12	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-12	P-20	24	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-23	1977.11
13	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-13	P-21	25	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-24	1977.11
14	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-14	P-22	26	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-25	1977.11
15	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-15	P-23	27	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-26	1977.11
16	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-16	P-24	28	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-27	1977.11
17	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-17	P-25	29	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-28	1977.11
18	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-18	P-26	30	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-29	1977.11
19	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-19	P-27	31	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-30	1977.11
20	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-20	P-28	32	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-31	1977.11
21	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-21	P-29	33	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-32	1977.11
22	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-22	P-30	34	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-33	1977.11
23	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-23	P-31	35	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-34	1977.11
24	土器底	残部	内面: ハサミ+ガラス	口径14.0cm、底径8.0cm、高さ10cm	12-24	P-32	36	土器底	内面: ハサミ+ガラス	口径9.0cm	P-35	1977.11

第28図 SD-261出土遺物(3)

SD-265溝（第23図）

【造構の確認・重複】南北方向の溝で、途中で屈曲している。長さ8mにわたって検出しており、北は調査区外に延びており、南側は削平されている。SD-260・262溝、SI-266竪穴住居跡と重複しており、SD-260溝より新しいが、SD-262溝とSI-266竪穴住居跡との新旧関係は不明である。

【規模】上幅0.3m、下幅0.1m程であり、深さは最も深い部分で0.1m程である。横断面形は開いたU字形である。

【堆積土】黒色のしまりのない自然堆積土である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

SK-267土壤（第23図）

【平面形・規模】直径0.6m程のほぼ円形で、深さは0.1m程である。

【堆積土】褐色のしまりのない自然堆積土である。

【出土遺物】遺物は出土していない。



第29図 SD-261出土遺物(4)

SK-268土壤（第23図）

〔重複〕 SD-260溝と重複しており、これより新しい。

〔平面形・規模〕 長径1.1m、短径0.8m程の長階円形で、深さは0.2m程である。

〔堆積土〕 黒色のしまりのない自然堆積土で、堅く版塗状に締まった地山ブロックを少量含む。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

SK-269土壤（第23図）

〔重複〕 SD-263溝と重複しており、これより新しい。

〔平面形・規模〕 1辺が1m程の隅丸方形で、深さは0.1m程である。

〔堆積土〕 暗褐色のしまりのない自然堆積土で、堅く版塗状に締まった地山ブロックを少量含む。

〔出土遺物〕 少量の土師器の小片が出土した。

SK-270土壤（第23図）

〔重複〕 SI-266堅穴住居跡と重複しており、これより古い。

〔平面形・規模〕 長径2.4m、短径0.2mの長階円形で、深さは木の根による擾乱が著しいため不明である。

〔堆積土〕 黄褐色のしまりのない自然堆積土である。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

SK-271土壤（第23図）

〔重複〕 SD-260溝と重複しており、これより古い。

〔平面形・規模〕 長径0.6m以上、短径0.2mの長階円形で、深さは0.5m程である。

〔堆積土〕 黄褐色のしまりのない自然堆積土である。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

SK-272土壤（第23図）

〔重複〕 SD-261溝と重複しており、これより古い。

〔平面形・規模〕 長径1.1m以上、短径0.3mの長階円形で、深さは0.6m程である。

〔堆積土〕 黄褐色のしまりのない自然堆積土である。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

このほかに江戸時代の墓を検出した。齒と寛永通寶が出土している。

第12次調査で検出された遺構は以下の通りである。

SD-273・274溝（第32図）

L字形に折れ曲がる一連の溝である。

〔遺構の確認・重複〕 SD-273溝はほぼ東西方向の溝であり、長さ19mにわたって検出しており、西半部は削平されている。SD-274溝はほぼ南北方向の溝であり、長さ3m分を検出しており、北側は削平されている。両者のコーナーでSD-275溝と重複しているが、調査時には新旧関係は確認できなかった。

〔規模〕 上幅は1~1.7mで、下幅は0.4~0.8mであり、深さは最も深い部分で1.1m程である。横断面形はLが開いたU字形である。

〔堆積土〕 SD-260・261溝と同様に3層に大別でき、1層は黒色の自然堆積土で、2層は地山ブロックを多量に含む崩落土である。3層は地山ブロックを多く含む人為的に埋め戻された土である。

〔出土遺物〕 調査時に両者とSD-275溝からの出土遺物を区別して取り上げていないため、3者が混じっている。しかし、大部分はSD-273溝の東端部の底面からまとまって出土している。縄文土器と上師器が出土した（第30・31図）。土師器には壺、器台、壺、甕、台付き甕、器台などがある。

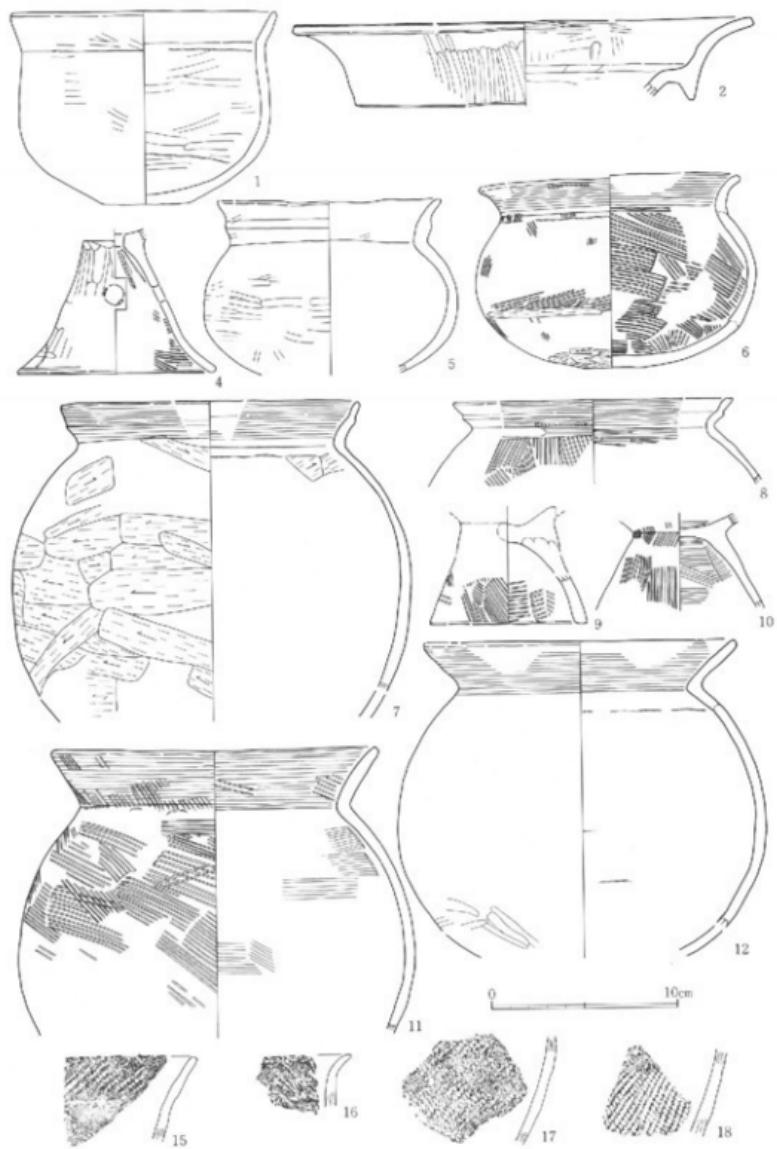
SD-275溝（第32図）

〔遺構の確認・重複〕 南北方向の溝であり、北端部を長さ3m分検出した。SD-273・274溝のコーナー部分で重複しているが、新旧関係は確認できなかった。

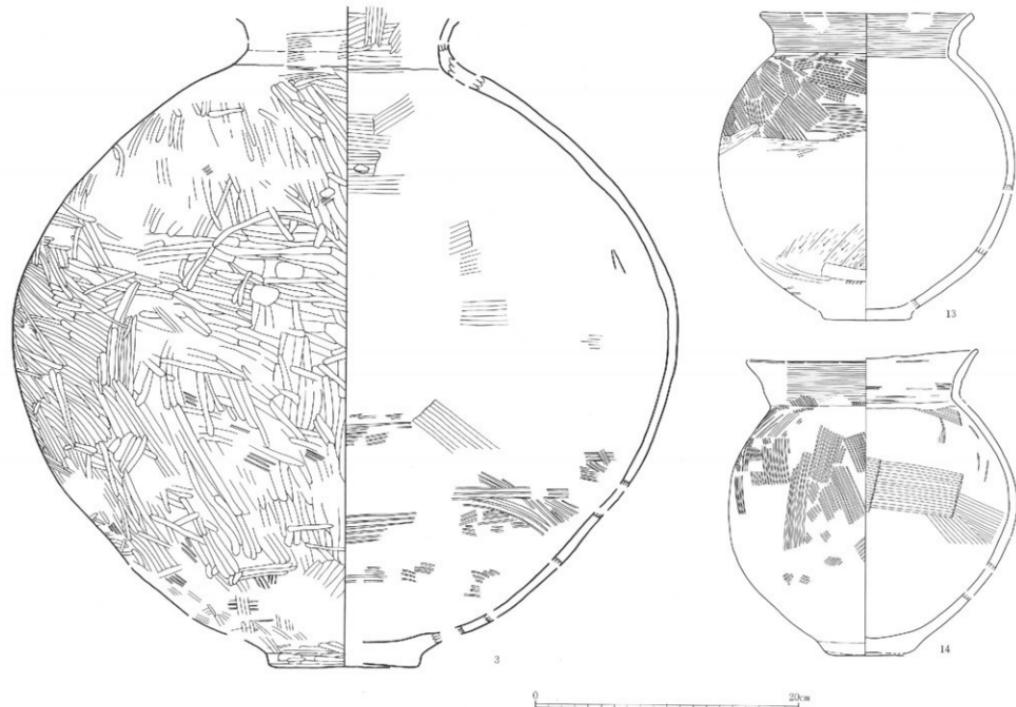
〔規模〕 上幅は3.2mで、下幅は2mであり、深さは0.8m程である。

〔堆積土〕 2層に大別でき、1層はしまりのない黒色の自然堆積土で、2層は粘性のある暗褐色の自然堆積土である。

この他SD-276溝は南北方向の溝であり、灰白色火山灰を堆積土中に含む溝より新しいものである。

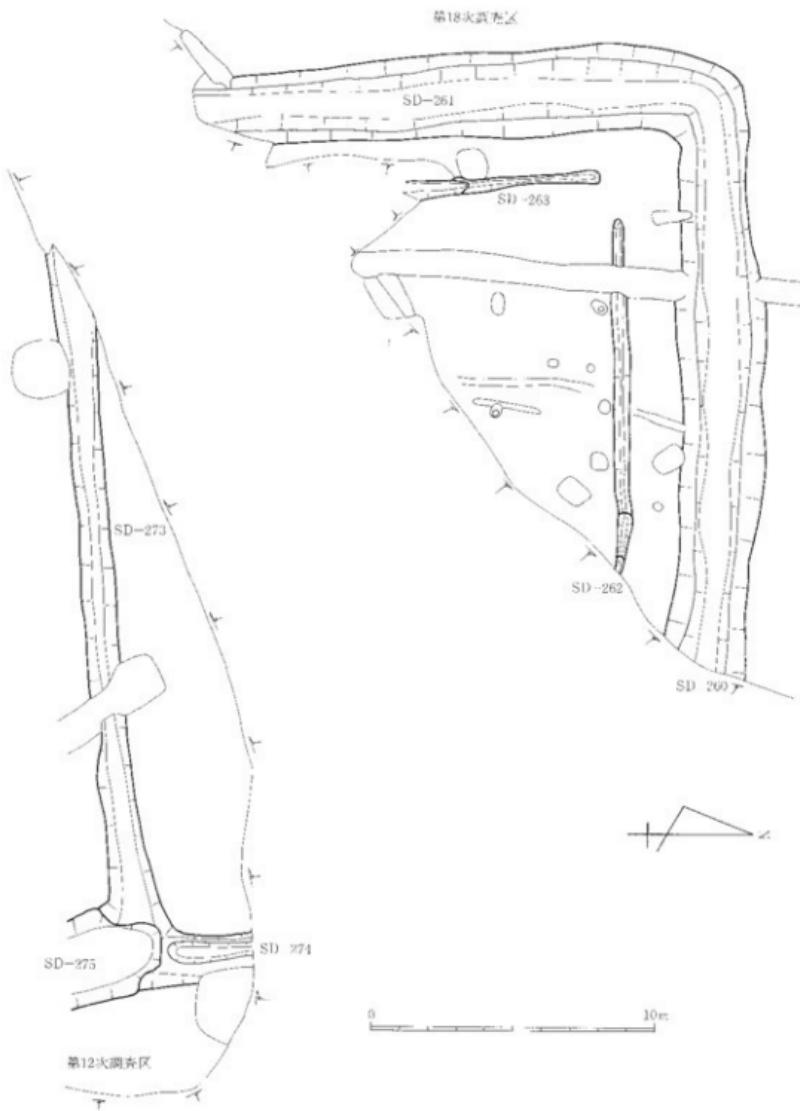


第30図 SD-273出土遺物 (1)



番号	種類	部位	寸法	説明	部品番号	部品番号	種類	寸法	説明	部品番号	部品番号	種類	寸法
1	土器	縦	内側底付付外側、裏底付付内側、縦	底径3.2m、高さ0.4m、底面積1.4m ²	12-2	12-2	土器	縦	内側底付付外側、裏底付付内側、縦	13-1	13-1	土器	縦
2	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	底径1.0m、高さ0.24m、底面積0.78m ²	14-1	14-1	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	14-2	14-2	土器	縦
3	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	底径1.0m、高さ0.24m、底面積0.78m ²	14-3	14-3	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	14-4	14-4	土器	縦
4	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	底径1.0m、高さ0.24m、底面積0.78m ²	14-5	14-5	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	14-6	14-6	土器	縦
5	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	底径1.0m、高さ0.24m、底面積0.78m ²	14-7	14-7	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	14-8	14-8	土器	縦
6	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	底径1.0m、高さ0.24m、底面積0.78m ²	14-9	14-9	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	14-10	14-10	土器	縦
7	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	底径1.0m、高さ0.24m、底面積0.78m ²	14-11	14-11	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	14-12	14-12	土器	縦
8	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	底径1.0m、高さ0.24m、底面積0.78m ²	14-13	14-13	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	14-14	14-14	土器	縦
9	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	底径1.0m、高さ0.24m、底面積0.78m ²	14-15	14-15	土器	縦	外底付付外側ハマリノリ、内底付付内側ハマリノリ、縦	14-16	14-16	土器	縦

第31図 SD-273出土遺物(2)



第32図 第12・18次調査遺構配置図

2 考 察

調査の結果、溝や堅穴住居跡が検出され、溝からはまとまって多くの遺物が出土した。ここではまず、遺物の年代を検討し、さらに遺構の性格について考えてみたい。

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、北大式土器、十製品、石器、石製品がある。これらのうちの大部分は土師器であり、他は少数である。

土師器には、壺、高壺、器台、壺、甌などがある。

壺は有段のもので、①:段が上部にあり、口縁部が強く外反し、体部が強く脹らむもの（第25図1・2、第26図1・2）、②:段が上部にあり、口縁部が外傾し、体部がやや脹らむもの（第30図1）、③:段が中央やや上部にあり、口縁部が直線的に外傾し、体部が強く脹らむもの（第25図3・5・7）、④:段が中央やや上部にあり、複合口縁で口縁部が外傾し、体部がやや脹らむもの（第25図6）、⑤:段がやや下部にあり、口縁部が直線的に外傾し、体部がやや脹らむもの（第25図4）とがある。

高壺は壺部口縁部の小破片で、特徴は不明である。

器台には受け部と脚部が1点ずつある。受け部は小皿状のもので、貫通孔はない（第27図13）。脚部は円錐台状のもので、凹窓が4個あり、受け部との間に貫通孔がある（第30図4）。

壺には、①:有段口縁で、体部が潰れた球形のもの（第27図12）、②:複合口縁で、体部が強く張る球形のもの（第31図3）、③:単純口縁で口縁部が直線的に外傾し、頸部でくびれ、体部が潰れた球形のもの（第25図3、第26図8・9）、④:単純口縁で口縁部が直立気味に外傾し、体部が潰れた球形のもの（第26図10）とがある。

甌には、口縁部の直径が11~14cmで、器高の低い小型のもの、口縁部の直径が16cm前後の中型のもの、口縁部の直径が42cmの大型のものとがある。

小型のものには、①:口縁部がやや外反し、体部が球形で小さな平底のもの（第25図5）、②:口縁部が外反し、体部が潰れた球形で、底部のわかるものは小さな平底のもの（第30図5・6）、③:口縁部が直立し、体部が潰れた球形で丸底のもの（第26図11）とがある。

中型のものには、①:口縁部が外傾し、体部が球形のもの（第26図15、第30図11・12）、②:口縁部が外反し、体部がやや張りの弱い球形のもの（第27図18）、③:口縁部が外反し、体部が強く張る球形のもの（第27図17）、④:口縁部が外傾気味に立ち上がり端部で外反し、体部が球形のもの（第28図20・21、第31図13・14）、⑤:口縁部が外傾気味に立ち上がり端部で外反し、体部が強く張る球形のもの（第28図22）、⑥:口縁部が外傾気味に立ち上がり端部で外反し、体部が長胴気味の球形のもの（第27図16・19）、⑦:「S」字状口縁で、体部がやや張りの弱い球形のもの（第30図7）とがある。

大型のものは、口縁部が外傾するものである（第28図23）。

甕にはこの他に台の付くものがあるが（第30図9・10）、台部のみの出土のため全体の特徴は明らかではない。

これらはSD-260・261・273溝から出土している。出土状況をみると、SD-260溝では東端部の堆積土第1層下面から第2層の上面にかけて、SD-261溝では南半部の堆積土第1層下面から第2層の上面にかけて、SD-273溝では東端部の底面付近から、それぞれまとまって出土しており、一括土器が大半であった。こういったことから、これらはそれぞれ一括遺物とみて差し支えないと思われる。

次にこれらの共伴関係についてみてみる。SD-260溝からは、环①、壺②・③と小型の甕①が出土している。SD-261溝からは环①・③・④・⑤、器台、壺①～④、小型の甕③、中型の甕①～⑥と大型の甕が出土している。SD-273溝からは、环②、器台、壺①・②、小型の甕②、中型の甕①・④・⑦と台付きの甕が出土している。

一方、SD-260・261溝は、一連の溝であり、同一層位から出土していることから、両者の出土遺物はほぼ同時期のものと思われる。SD-273溝は、後述するようにこれらの溝と一連のものと考えられるが、出土層位が下位でありこれらより先行するものである。したがって、これらの上師器はSD-260・261溝出土のものと、SD-273溝出土のものとの大きく二つに分けられると思われる。前者には、环①・③・④・⑤、器台、壺①～④、小型の甕①・③、中型の甕①～⑥と大型の甕があり、後者には环②、器台、壺①・②、小型の甕②、中型の甕①・④・⑦と台付きの甕がある。

こういった土師器は、器種構成や器形の特徴から古墳時代前期の塙釜式に位置付けられる（氏家：1957）。塙釜式は、近年3段階に変遷するとされており（丹羽：1985、次山：1989、古川・白鳥：1991）、丹羽は第Ⅱ段階をさらに2時期に細分している。

今回出土した土師器のうちSD-260・261溝出土のものは、环では、口径に対して器高が低いことや、环③・⑤が存在すること、壺では、体部が球形で長胴化したものがみられないこと、甕では体部が長胴気味の球形のものが存在することなどから、3段階のうちでは第Ⅱ段階に属すると思われる。

SD-273溝出土の土器は、時期を特定できる特徴を持つもののがなく判然としない。しかし、第Ⅱ段階以降と考えられる器台が含まれており、SD-260・261溝出土土器より層位的に下位であるため、やはり第Ⅱ段階に属すると思われる。

以上のように今回出土した土師器はいずれも塙釜式の第Ⅱ段階に位置付けられる。しかし、両者は時間的には前後関係を有するもので、土器の内容には共通点もあるが相違点も多い。こういった点が第Ⅱ段階の細分に対応するのかどうかという問題については十分に検討できなかっただ。今後の検討課題である。

北大式土器には突瘤文や横位並列微降線文、帯縄文が施された深鉢（第28図24）と、突瘤文や隆帶一刺み、集合条線文が施されたU縁部破片（第25図6）、帯縄文と刻点列文が施された底部破片（第29図27）とがある。北大式土器は大きく3群に分けられており（千代:1965、森田:1965、齐藤:1967、川才:1983）、文様の特徴から北大I式と思われる。ただし、底部破片については刺みが楔形をしているため、後北式に属する可能性もあり、断定できない。

これらはSD-260・261溝から出土しており、塙釜式の第II段階に確実に共伴するものである。

ところで、こういった東北地方で発見された北海道系の遺物についてはすでに集成・論考されており（佐藤:1984）、北大式土器は状況証拠から南小泉式に伴うと推定されていた。また、秋田県宮崎遺跡（小松他:1987）や北海道の北海道大学構内遺跡（横山:1986）では南小泉式土器と共に伴している例が報告されている。しかし、今回の発見により、北大式土器は少なくとも塙釜式の第II段階まではさかのほると考えられる。

縄文土器と弥生土器は少量で、摩滅しているものが多く、混入したものと思われる。

縄文土器には鉢、皿などがあり、時期のわかるものは晩期のものである。

弥生土器には甕、鉢などがあり、時期のわかるものには中期・後期のものがある。

土製品は土鏡と円盤状土製品で、いずれも古墳時代前期のものである。

石器は剥片素材のものと所謂「特殊磨石」で、前者は縄文もしくは弥生時代のもので、後者は縄文時代のものである。

石製品は砥石であり、弥生もしくは古墳時代のものであろう。

次に造構について検討してみる。SD-260・261溝はL字形に巡り、幅3m程の比較的大規模な溝である。方向は東西・南北とほぼ一致しており、計画的に掘り込まれたものである。一方、第12次調査では、これと同方向で堆積土の状況が類似するSD-273・274溝が検出されている。これらの溝からは塙釜式の土師器が出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。したがって、この場所はSD-260・261・273・274溝によって方形に区画されていると思われる。規模は東西が約28m、南北が約20mである。

また、SD-260・261溝の内側にはこれらとそれぞれ平行するSD-262・263溝がある。位関関係からこれらは同時に機能していたと思われ、堆積土や底面の状況からこれらの溝は柱が抜き取られた柵の布設の可能性がある。このように考えた場合、柵によって囲まれた部分は東西が25m、南北が16m程と推定される（第2図）。

一方、SD-273・274溝の内側にはこのような溝は検出されなかったが、この部分は削平が

著しいため消滅してしまったと思われる。

なお、SK-268・269土壙の堆積土中には版築状に固く叩き締められた土が混じっており、少なくとも北辯と西辯には内側に盛土されていた可能性も考えられる。溝と柵の位臓関係や溝中に崩壊土のような土はみられなかったことからそれほど高いものではないと思われる。

このように古墳時代に溝（濠）と柵（塀）によって方形に区画されるものは各地で発見されており、前期の例としては、大分県日田市小追辻原遺跡（渋谷他:1988）、京都府城陽市森山遺跡（近藤:1977）、栃木県矢板市堀越遺跡（口賀野他:1988）、栃木県氏家町四斗蔵遺跡（橋本他:1991)、茨城県茨木町国生本屋敷遺跡（阿部:1989）があり、中期の例としては滋賀県栗東町野尻遺跡（栗東町文化体育振興事業団:1989)、栃木県小山市成沢遺跡（石橋:1986)、群馬県群馬町丸山遺跡（西田:1987)、群馬県前橋市荒子遺跡（鹿田他:1984)、群馬県前橋市梅木遺跡（千田:1986)などがあげられる。

こういったものは豪族の居館跡とされている。本調査で発見されたものも、第12次調査時に指摘されたように（皆原:1990）、豪族の居館跡と考えられよう。

時期は、溝出土の土師器から古墳時代前期の塙釜式第Ⅱ段階と思われる。2グループの土師器には相違点があり、瞬時のにも異なることから時間差が考えられるが、遺構に重複がないことから長期間存続したものとは考えられない。

他遺跡の例と比較してみると、立地の点では、交通の要衝に位置しているものが多いことは既に指摘されている（橋本:1988）。本遺跡は古代には城柵である伊治城が造られており、水陸の交通の要衝に位置しているといえる。規模の点では、堀越例や丸山例に近いが、本遺跡例は最も小さく柵の内側の面積は約400m²である。

平面形については、直線的方格プランが最も古いとされている（橋本:1987）。本遺跡例はこの見解と矛盾はしないが、同様の形態のものが古墳時代中期にもあり、この形態のものが必ずしも古いわけではないようである。

居住者については、居宅の類型化から性格が推定されており（橋本:1987）、それによれば丸山類型にあたり、中小の首長クラスということになる。

なお、居館の規模と居住者のクラス、古墳の規模については強い関連があると予想されているが（橋本:1987、阿部:1990）、本遺跡の周辺では現時点では前期古墳は確認されていない。

内部には竪穴住居跡がみられるものが多い。SI-266竪穴住居跡は居館とは同時に存在しないとみられ、内部の遺構は不明である。

また、出入口の施設がみられるものもある。本遺跡では柵が北西のコーナーで切れており、あるいはこの部分に出入口が想定できよう。

その他の遺構については、SD-264溝は出土遺物から古墳時代前期のもので、居館廃絶後のものである。SD-265溝も居館廃絶後のものであるが、時期は特定できない。

SI-266堅穴住居跡は、出土遺物がなく時期を特定できない。

SK-270～272土壤はその形態からTビットと考えられる。時期は古墳時代前期以前である。他にSK-268・269土壤は古墳時代前期より新しい。SK-267土壤は時期を特定できないが、堆積土が類似することからSK-268・269土壤と同様の年代が考えられる。

3 ま と め

- 1 本調査では古墳時代前期の豪族居館が発見された。規模は小さいものの、溝と扉で区画されている。従来知られているものの中では最も北に位置する。
- 2 塩釜式第Ⅱ段階の土器と北大式土器が共存することが確認された。従来不明確であった北大式土器の開始が古墳時代前期までさかのぼることが明らかになった。
- 3 豪族居館で北大式土器が発見されたことは、古墳文化と統繩文文化の接触の在り方を考える上で貴重な資料である。

引用・参考文献

- 阿部 義平（1989）：「国生本屋敷遺跡」「関東の豪族居館跡」茨城県考古学協会
- 阿部 義平（1990）：「宮殿と豪族居館」「古墳時代の研究」2
- 阿部 義平（1991）：「関東南部の豪族居館」「季刊考古学」36号
- 石橋 知明（1986）：「成沢遺跡」栃木県埋蔵文化財保護行政年報 栃木県教育委員会
- 氏家 和典（1957）：「東北土器型の型式分類とその編年」「歴史」第14集
- 小松正大他（1987）：「宮崎遺跡発掘調査報告書」西目町教育委員会・秋田市遺跡保存会
- 近藤 義行（1977）：「森山遺跡発掘調査概報」「城陽市埋蔵文化財調査報告書第6集
- 佐藤 信行（1984）：「宮城県内の北海道系遺物」「宮城の研究」1
- 鹿田 雄三（1984）：「荒紙荒子遺跡の方形区画遺構」「研究紀要Ⅰ」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 渋谷忠章・土井和幸（1991）：「九州の豪族居館」「季刊考古学」36号
- 白鳥良一他（1978）：「伊治城跡Ⅰ」多賀城開闢遺跡発掘調査報告書第3集 宮城県多賀城跡調査研究所
- 青柳 祥夫（1990）：「第12次調査」「伊治城跡」「築館町文化財調査報告書第3集 築館町教育委員会
- 高橋与右エ門・高橋信雄（1991）：「北海道の統繩文文化と東北」「北からの視点」日本考古学協会宮城仙台大会シンポジウム資料集
- 田才 雅彦（1983）：「北大式土器」「北奥古代文化」第14号
- 千田幸生他（1986）：「梅木遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 千代 樹（1965）：「北海道の統繩文文化と編年について」「北海道考古学」第一輯
- 次山 淳（1989）：「東北」「古墳時代前半期の古墳出土土器の検討」「埋蔵文化財研究会
- 西田 健彦（1987）：「丸山・北原」群馬県教育委員会
- 丹羽 茂（1985）：「今熊野遺跡」宮城県文化財調査報告書第104集 宮城県教育委員会
- 橋本 博文（1987）：「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」「古代探査Ⅱ」

- 橋本 博文（1988）：「古墳時代における首長層居宅（總論）」『考古学ジャーナル』6289
- 橋本 博文（1991）：「関東北部の豪族居館」『季刊考古学』36号
- 橋本 博文（1991）：「四斗蔵遺跡」『日本考古学年報42』日本考古学協会
- 藤田 和尊（1991）：「近畿の豪族居館」『季刊考古学』36号
- 古川一明・白鳥良一（1991）：「東北」『古墳時代の研究』6
- 森田 知忠（1965）：「北海道の縄繩文化」『古代文化』十九巻二号
- 栗東町文化体育振興事業団（1989）：「野尻遺跡」埋蔵文化財発掘調査昭和63年度年報
- 横山 英介（1986）：『北大構内の遺跡』5

伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずきわった鎮守將軍 田中多太麻呂らに叙位、外從五位下道嶋三山は從五 位上を賜う。	統日本紀
768	2	12. 陸奥や他国百姓で伊治・桃生に住みたいものの 課役を免ずる。	統日本紀
769	3	1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に坂東8国百姓を募り安置しようと する。 6. 栗原郡をおく。これはもと伊治城である。 (「統日本紀」では神護景雲元年11月乙巳条に収める が錯簡とみられここでは神護景雲3年6月9日乙巳 説をとる) 6. 浮宿の百姓2,500人を伊治城に遷す。	統日本紀
780	宝亀11	3. 上治郡大領伊治公告麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大幡 按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで多賀城にせま り府庫の物をとり放火する。	統日本紀
792	延暦11	1. 斯波村の夷阻沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村 の俘にさまたげられて果せないでいることを訴える。	類聚国史卷 190
796	15	11. 伊治城と玉造峠の中間に1駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越 後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅をおく。	日本後紀

西暦	和暦	記事	文献
837	承和4	4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀
905	延喜5 (着手)	延喜式 ○神名式 陸奥国100座 栗原郡7座 大1座 表刀神社 小6座 志波姫神社 <small>ミタニヒメノミコト</small> 雄鋸神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 ○民部式 東山道・陸奥国大國 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式 陸奥国駅馬 ……玉造、栗原、磐井……各5疋	延喜式
931～938	承平年間	和名類聚抄 陸奥国 栗原郡(久利波良) (郷名)栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄
1062	康平5	8. 前9年の役で源頼義軍は、栗原郡當間に到り、清原武則軍と合う。軍を編成し磐井郡中山に赴く。	陸奥話記
1189	文治5	8.7 文治の役で源頼朝の奥羽攻めに対し、藤原泰衡自身は、国分原鞆橋(仙台市)に陣し、その後方栗原・三迫・黒岩口・一野辺には、若九郎大夫らを大將軍となし数兵の勇士を差しむけた。 8.21 頼朝軍は暴風雨について途中栗原・三迫などの要害による平泉方の抵抗を排しつつ松山道より津久毛橋に到る。	吾妻鏡
1190	建久1	2.12 頼朝の征東に最後まで抵抗する大河次郎兼任と 頼朝方の軍士、在国御家人らとが栗原の一迫で戦う。 3.10 栗原寺に逃げのびた兼任が樵夫らに殺害される。	吾妻鏡

写 真 図 版



図版1 上:遺跡全景(南から)
下:調査区遠景(西から)



図版2 上:第17次調査区
下右:調査区東側(西から) 下左:調査区西側(西から)

図版 3

- 上: SB-220建物跡
(東から)
中: SB-246, 152建物跡
(東から)
下: SB-236建物跡
(西から)



図版4

- 上: SB-237建物跡
(北から)
中: SB-243,244建物跡
下: SB-248建物跡
(南から)



図版 5

上: SB-243、244建物跡
(西から)

中: SB-243b建物跡

下: SB-244b建物跡





図版 6

- 上右: SK-233 土壌断面
- 上左: SD-229 溝跡断面
- 中右: SB-244b 建物跡柱穴
- 中左: SB-152b 建物跡柱穴
- 下: 調査風景

図版 7

上:第18次調査区

中:SD-261溝跡

下右:遺物出土状態

下左:SD-261溝跡断面





229-3



240-5



240-7



X-1



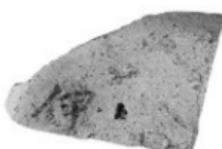
240-1



233-1



227-2



SD-227



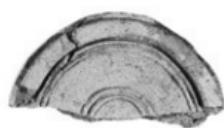
X-13



X-8



X-10



X-9

图版8 出土遗物(1)



152b-1



152b-5



233-3



233-8



233-9

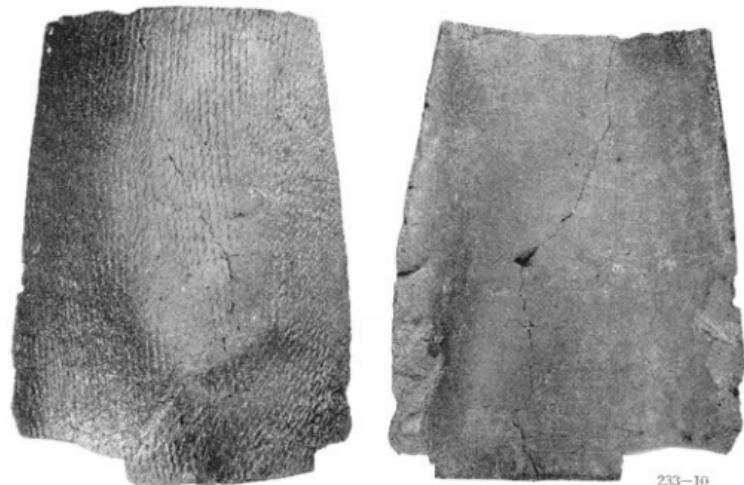


233-5



233

図版9 出土遺物(2)



233-10



238-1



238-2



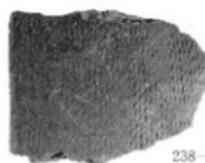
238-3



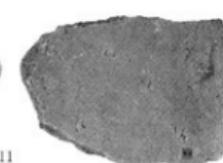
238-4



238-5



238-11

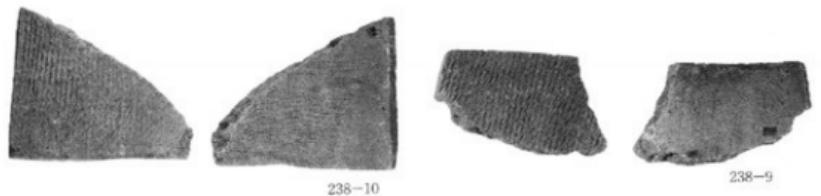


238-12



238

図版10 出土遺物 (3)



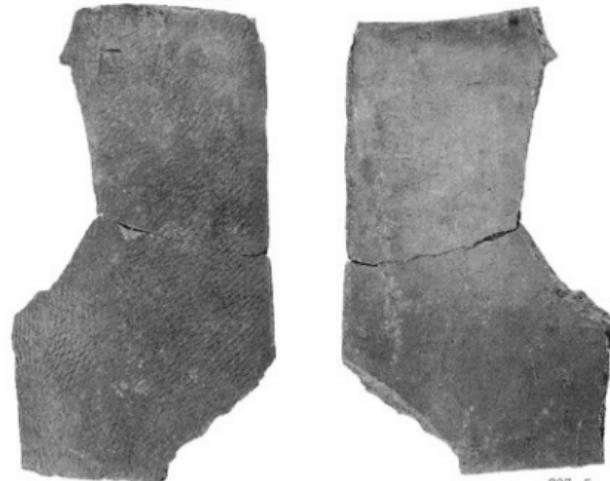
238-10

238-11

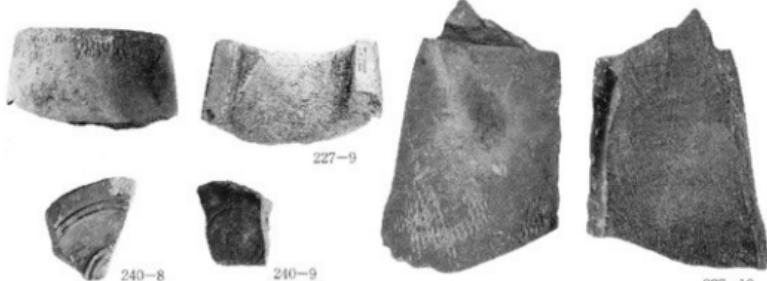


238-14

238-17



227-5



227-7

240-8

240-9

227-10

图版11 出土遗物 (4)



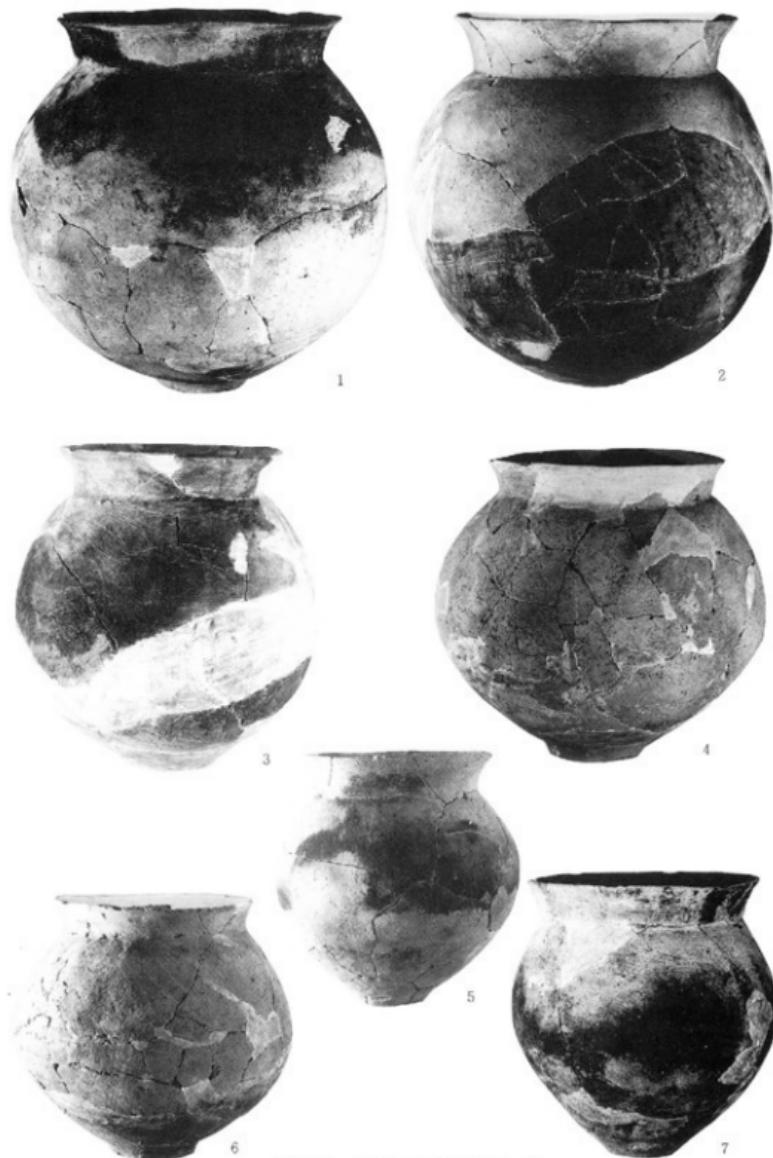
図版12 第18次調査出土遺物 (1)



図版13 第18次調査出土遺物 (2)



図版14 第18次調査出土遺物 (3)



図版15 第18次調査出土遺物 (4)

染館町文化財調査報告書 第5集

伊治城跡

印 刷 平成4年3月20日

発 行 平成4年3月31日

発行 染館町教育委員会
青城県栗原郡染館町高田二丁目1-10

印 刷 南部屋印刷株式会社
青城県栗原郡染館町高田一丁目7-36
